
復讐者の仲間のような感じの人

仮名ライター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐者の仲間のような感じの人

【Nコード】

N8860Z

【作者名】

仮名ライター

【あらすじ】

原作のクルタ族が虐殺される前に、クルタ族の1人に転生したオリ主が、ある目的のため何とか生き延びようと些細な努力をし、クラピカと共に出来ることをしながら原作に介入する物語

イチ話

俺は思考する

何だろうね俺はもし他の人に話したら、頭がイカれてるって言われるから絶対に内緒にしてる事がある

何と前世の記憶がある、しかも結構鮮明にあるのだ、少々ぼやけている箇所もあるが、支障はないだろうと思う

俺は生まれ変わりを経験したのである、

しかし内心はしゃぎまわったね、想像して欲しいまさしく頭脳は大人体は子供を体現してるのだ

色々妄想するだけで楽しい、赤ちゃんの頃はその妄想だけですごくしたぐらいだし

よく笑う赤ちゃんではなく、ニヤニヤしてる気持ち悪い赤ちゃんだったと育ての親は言ってる

ここで疑問に思うが俺には親はいない、一応いたけど自分を産む時にかなり衰弱してお亡くなりになったらしい

父親はそれが精神的にショックを受け後を追うように病気でお亡くなりになった、何と脆いお方だ

接する機会が少なかったからあまり悲しくはなかった

そんな悲劇の過去を振り返るより、薄情かもしれんが将来の輝かしい未来の方が最優先事項なのだ

だが輝かしい未来を想像して喜んでいられるのもつかの間だった

俺は生まれ変わってからこの世界に色々疑問を持ち始めた、周りの人間のおかしい発言がおかしいのだ

魔獣が出たやら色々だ、前世に魔獣なんて存在しないし聞いた事ない、もしや前世でそういう魔獣がいたとしても秘匿されてたとか？

と考えていたが

これが俺にとってこの世界が別の物だと何となく気付かせる、聞き

捨てられない言葉を聞いたのだ、世界とかもはやどうでもよくなる
代物

――【クルタ族】俺の住む村の民族の名前

――そして隣に住んでる夫婦の子供の名前が【クラピカ】

いやいやさすがに生まれ変わったりするような非現実的な事を経験
した俺だが

そんなクソつたれな事ないだろ偶然だよ偶然だってそれはないって
否定ともしやまさか？ってな感じで混乱しまくっていた

確定ではない、情報が足りないしそんな訳ないと否定しまくってい
たが

ところがどっこい 現実是非情なのだ

成長するにつれ脳みそに叩きこまれるこの世界の常識、文字、文化
酷似してるで済ませられないレベルじゃない、それならどれだけ良
かったか

組み上がったピースが嫌でも想像したくない物に出来上がる

そう俺の前世とは異なる世界、だが知っているのだこの世界を事を

少年ジャンプの俺が最も好きな作品【H×H】の世界

有り得ないと否定したいが、見に起きた現実を受け入れるのは時間
かかったが

受け入れない現実逃避するのは愚か者のする事だ、多少諦めな感情
もあつたかもしれないがそれはそれだ

認識したらもう嫌になってくる自分の生まれ変わった環境に

【クルタ族】である俺の死亡フラグを回避せねばならないのだ

開幕

何だかんだで今現在8歳

原作知識のある俺だが今の所出来る事は少ない

クルタ族を皆殺しにする【幻影旅団】に抵抗出来る策を何もしていないのだ

このまま行けば数年後に起きる、クラピカ君以外のクルタ族目玉挟まれ皆殺し事件が発生する

案はあるが実行するのは不可能

1 クルタ族の皆に数年後に幻影旅団って言うイカれてる連中がやって来るから逃げようぜ！作戦

子供の戯言と言われまず誰も信じてくれない、仮に信じてくれたとしてもどこに逃げるって話した、原作知っている俺だからわかる幻影旅団はどこに居ようと追って来る恐ろしい連中のため不可能

2 俺だけあらかじめ逃げようぜ！作戦

俺達クルタ族の集落はかなりの山の奥地で、森や山に囲まれた言うならば秘境の地に住んでいるのだ

別の街に行く道は大人しか知らないので集落から出ても野垂れ死んで、魔獣のご飯になるのが落ちだ
いざという時はありかもしれない、体を鍛え街までの行き方を知ったら決行可能もありだが現在は不可能

3 H×Hの世界の異能【念】を覚え返り討ちにしようぜ！作戦

これは念使いにならなければならない、あの幻影旅団のウボォーがなかり強かったと言ったぐらいだ

念は間違いなく知ってるどころか会得してるだろう、念能力者には念能力しか対象出来ないはずだし

だが無理だった大人に遠まわしに念教えてくれと言ったら

なぜ念を知っているのかはさておき今の俺（8歳）には教えるのは早すぎる、いずれ心身共に成長したら教えるから我慢しろ、だとさ諦めきれずに泣きついたけど、怒鳴られ却下されてそれ以来念の事を聞いても無視されるしまつ、覚えたしても追いつくのはまず無理か、よってこの案も不可能

4 クルタ族唯一の生き残りクラピカにくっついて一緒に生き残ろうぜ！作戦

これが下手したら生き残る確率が案2より高いかもしれないただ原作知識のある俺でも、原作5年前とだけ書かれてただけで明確に書かれていないため不安が多い

それに今クラピカ君俺と同じ8歳原作では確か17歳、幻影旅団に村を襲われたのは12歳ぐらいの計算だ

この案を実行するなら、クラピカ君が12歳になったら四六時中張り付いていなければならない、しかしこれではまるでストーリーだ生き残るためならしょうがないけど

結論を出すのは早計だが、案4が一番生き延びる可能性が高いふーむ、そうなら実行するにしてもクラピカが12歳になるまで時間があるし今出来る事とは何だろう？

1 肉体の強化（現在進行形）

2 念をどうにかして習う（今のところ無理）

3 生き延びたその後の事を考える

4 案3のため少しでも外の知識&生きるための知識

5 死亡フラグ回避作戦案4のためにクラピカ君に好印象を与え、ストーリー行為しても気にされないぐらい仲良くなる（現在進行形）

取り敢えずこれぐらいかな、全ての案は直ぐに解決出来る物じゃないな4年の期間で出来る事をしよう

念は覚えるのは俺の中では確定事項だ、理由は簡単念使いになりた
いからだ！

死亡フラグ回避も大事だが原作ファンとしてはこれは捨て置けんだ！

今は無理だがその下地作りの肉体強化は必須だな、この世界はアホな感じに人間の限界値がおかしい

前世では人間がどんなに頑張っても越えないラインを努力次第で
余裕でぶつちぎる

才能や環境によって違っても知れないが、原作のクラピカ君は初期
の頃から身体能力はそれなりに高い

同族である俺のポテンシャルもそう悪くないはずだ、少し前から鍛
えてはいるがよりいっそ取り組もう

知識は勉強あるのみ、これはあまり得意ではないがやれる事はやつ
ておくべきだな

――最後のクラピカ君と仲良くなるか、これが一番ミスったらヤバ
いかも……

「クラピカくううん！ あ そ ぼ ！」

窓から少年がひょっこりと顔を出す

「うん、今行くから待って」

今俺が声をかけたのはシヨタツ子クラピカ君だ

原作の絵では女に見間違ってくるくらいの中性的な顔してる、実際今でも
男と知らなかったら女と思えるぐらいだし

「お待たせ、今日はどうするの？」

「とりあえず広場にいこうぜ、どうせ皆いるだろ」

「うん」

クラピカ君がコクリと頷き俺の後を付いて来る

意外な事に今のクラピカ君は原作のようなクールな感じではない、大人しく素直でいい子だ

やはり目玉抉られ皆殺し事件以降、一人で生きて行くためにあんな感じになったのだろうか

原作でもクラピカがゴン達に出会うまでの経歴は明かされてないしな歩きながら子供らしい会話をしながら村の広場に付いた

広場には年齢様々な子供が数人いる、俺とクラピカ君は同じ年齢だが俺の方が早く生まれたからお兄さんだ

広場で何時のように自分とクラピカ君含む子供達としようもない遊びをして遊んでいる、精神年齢が幼子ではないからガキの遊びなぞつままないが、クラピカ君ストーリーカー計画には必須なんだからしょうがない

そんな事を考えていたら誰かにクイツと袖を引っ張られた

「どうしたの？」

いつの間にか俺のそばにいたクラピカ君が、首を傾げて俺を真っ直ぐに見つめてくる

何てあどけない顔してやがるんだ、これが数年後復讐のためなら死んでもいいとか言い出す青年になるんだから、もうゾツとするね

「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなって考えてただけ」

「そう……」

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」
「うん」

先生とはクルタ族の教育係みたいな人だ、山奥に住んでる民族とは思えない程教育水準は高い、数学、H×H世界の歴史やその他諸々原作のクラピカの博識っぷりが納得するぐらい濃い事まで習わされる、詰め込み教育ってレベルじゃねーぞって感じた

だからこそ少数民族なのかもしれないな、クルタ族は1人1人の人間がかなり優秀で知能と身体能力が高い、これを先祖代々受け継がせて行くなら少人数の方が効率がいい

山奥に住む自分達の民族だけの文化で完結せず、他国多方面の知識を持ちながら、それでも極力クルタ族以外の者と関わらない

頭がいいからこそ理解してるんだろう、自分達の持つ特殊な瞳【緋の目】の希少価値を、世の中にいるゲス地味な収集家が居る事だからこそこそこやって隠れるように住んでるんだろうな、ぶっちゃけ隠れるなら街にクルタ族って事隠して住んだ方がいいと思うけどねまあ無理だろうね、民族のプライドが邪魔してそんな事しないだろう

「ねえ、聞いてる？」

「あーすまん聞いてなかった、何？」

「今日から勉強の後に体術を教えるって先生言ってたけど、何をするのかなって」

「そう言えばそんな事言ってたな、うーん体術って何するんだろっ
な、殴り合いとかか？」

「殴り合いってちょっと怖いね……」

「心配すんなって冗談だから、いきなりそんな事させられないだろ」
「……うん」

ゴクリ……これ本当に原作クラピカみたいになるのか？ 仲良くなるうぜ作戦決行してきてもう結構たつが、復讐とかそんな概念から

程遠い性格してんぞ

その後先生による地獄の勉強会で頭を酷使し、慣れない対術の稽古で体中悲鳴をあげている俺、尋常じゃないぐらいスパルタだ
別に俺が特別に貧弱という訳ではない、早朝から肉体強化のために色々やってるせいで疲れがドツときたのだ

「大丈夫？」

「平気だつて」

心配してくれるのはクラピカ君だけだ、他の糞ガキ共はさつさと家に帰りやがった

しかしクラピカ君はいい子だ、これで女の子なら完璧なのに

「どうしたの、ジツと僕の事見て？」

「何でもない、それより家に帰ろうぜ」

「うん、でもちよつと待って、はいこれ」

クラピカ君が俺にくれたのは、何かドロドロした緑色した固形物が入った木を丸く加工した小さなコンパクトだった

「これ何？」

「前に父さんと出掛けた時に取って来た薬草を潰して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付けるといいって父さん言ってた」

「くれるのか？」

「うん、使つて」

なんと……優しい子だ、俺が女なら惚れとるぞ

「おお、ありがとぅ、大事に使わせてもらうぞ」

「なくなったら言っで、まだ家にあるから」
「おう」

家に付くまで、クラピカ君と今日習った事をお互いに話し合う
歴史や別の国の文化に人一倍興味のあるように、楽しそうな顔して
俺に明日はどんな事勉強するんだろ、と語ってくる

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」
「うん、まだ明日ねアルベル」

別れを告げ、クラピカ君は家に入って行った
アルベルこと俺もお世話になってる育ての親の家に入る

「ただいま」

お帰りなさいと返ってくる育ての親のおばさんの声を聞き、どこか
不安な気分になる
おばさんが作ってくれた夕食と一緒に食べながら、今日どんな事勉
強した今日何があったかを話す、おばさんは微笑みながらそれを聞
いてくれた
自分の部屋に戻る

吐き気がする
俺はゲスだ
おばさんは死ぬ
幻影旅団に殺される

俺が必死に頭を下げ原作知識をおばさん喋ったらもしかて避けられ
るかもしれない

だが俺はそれをしない、諦めているから

おばさんの命も先生の命も子供達の命も、クルタ族の命全てを達観してるとか悟ってるとかそんなんじゃない、あきらめの感情の先に俺の中に生まれた物は

めんどくさい

俺は凡人だ、自分の事を考えるだけで精一杯なんだ

他人の命を救うとか無理、どうするとか考えるのもめんどくさい自分が助かれればそれでいい

手に持った手帳、忘れてしまわないように原作知識を日本語で書き続けた物を何度も読み返す、読み返したところで無駄なのはわかってるんだけどね……

手帳を部屋に置かれた棚にしまう、隠す必要はないどうせ見つかったも俺以外の人間は読めないし、盗られたとしても写しがまだ何冊がある

「……ゲロ吐きそう」

そう呟き、俺は布団に寝転んで目を瞑り考えるのを放棄した

クラピカ

「クラピカくううん！ あ そ ば ！」

もうそんな時間だったんだ、僕は慌てて窓から顔を出して外にいる

アルベルに向かって言う

「うん、今行くから待って」

鞆を手に取り、早足で自分の部屋から出る、朝食の後片付けしている母さんに向かって声をかけた

「アルベルが来たから行ってくるよ」

「ええ、行つてらっしゃい」

「うん、行つてきます」

扉を開けたら僕を待つてくれてるアルベルがどこか不自然な笑顔をさせて立っている

いつもアルベルはこんな感じた、ちよつと前にその事を言ったら「そうか？」と不思議そうに悩んでいた

普段見せないアルベルの困った顔を思い出すだけで笑っちゃいそうになる

僕は笑いそうになるのをこらえた、いけないいけない待つてくれてたんだし

「お待たせ、今日はどうするの？」

「とりあえず広場にいこうぜ、どうせ皆いるだろ」

「うん」

基本僕はアルベルとしか遊ばない、広場の皆とも仲良くしてるけど誰が一番仲がいいと言われたらアルベルだって答えると思う

だつてずっと一緒にいるから、僕が物心付いた頃からアルベルと二人で一緒にいる

それが普通何だと思つてるし今でもそう思つてる

広場に付くと皆と遊んでいると、いつの間にか皆の輪の中から外れ

考え事をしているのか1人佇んでいるアルベルがいた
アルベルに近寄り声をかけた

「アルベル？」

呼んでも反応しないからアルベルの袖を引っ張る

やっと気付いのかアルベルが僕の方を向きハツとした表情になった

「どうしたの？」

「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなんて考えてただけ」

「そう……」

嘘だね、アルベルがこういう顔してる時は変な事考えてる時だけだ、
ダテに僕とアルベルはずっと一緒にいるわけじゃない

何考えてたのって聞いても、はぐらかされるからもう聞かない事に
してる

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」

「うん」

僕は勉強が好きだ、先生の話を聞いてるだけでワクワクする

ふとアルベルの方を見ると、相変わらず難しい顔しながら頭を捻っ
てる、アルベルは歴史があまり好きじゃないらしいこんな面白い
のに

授業も終え先生が昨日言ってた体術の時間になった

僕は体を動かすのも好きだけど、殴ったり殴られたりするのは好き
じゃない

さっきアルベルがたいしたことないって、僕を安心させるために言
ったのを思い出しちよっと気持ちが落ち着く

体術の時間が始まった、先生がアルベルを指名して基本の体の動かし方などを説明する

別に先生はアルベルをいじめようとしてる訳じゃない、アルベルは同年代や少し上の人より鍛えてる

朝早く起きて運動してるのをアルベルは皆には黙ってやってる事は知っているがバレバレだ

僕にも教えてくれないのはちょっとムカつく、体術を習う事だし今度から僕もアルベルに話して一緒にやろうと思う、断っても聞いてやらない僕に黙ってた罰だ

アルベルが先生やらみんなの実験台にされ結構ボロボロになってる体術の時間も終わり、先生に挨拶して皆帰って行く

僕はアルベルが少しだけ心配になった

「大丈夫？」

「平気だつて」

大丈夫って言うてるが体はそうは見えないあちこち痛そうに庇っている

またよからぬ事を考えてるんだろう、なぜか僕の事をジッと見てくる

「どうしたの、ジッと僕の事見て？」

「何でもない、それより家に帰ろうぜ」

そういえばアルベルに渡そうと思ってた物があるんだ

「うん、でもちょっと待って、はいこれ」

鞆から小さめの木製のコンパクトを取り出しアルベルに手渡した

「これ何？」

「前に父さんと出掛けた時に取って来た薬草を潰して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付ける　　といいつて父さん言ってた」

「くれるのか？」

「うん、使って」

「おお、ありがとう、大事に使わせてもらうぞ」

「なくなったら言つて、まだ家にあるから」

「おう、ありがとう」

普段素直じゃないアルベルが素直にお礼を言ってくれるから、何か恥ずかしい

家に帰る最中、歴史などの楽しさをアルベルにわかって貰うため多
いに語った

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」

「うん、まだ明日ねアルベル」

もつと話したかったけど残念、アルベルと別れ家に入る

やっぱりアルベルという時が一番楽しい、明日はアルベルと何しよ
う？

変わらないたわいもない日常、母さん父さんアルベルやクルタ族の皆
こんな日がずっと続けばいいのに

イチ話（後書き）

クルタ族の設定は独自解釈や設定が入ってます

クラピカの性格は幻影旅団の虐殺やまだ年齢的なものを考え原作とは全く違う物になってますので違和感がありまくりです

原作クラピカファンの皆様申し訳ありません

後クラピカは男であってますよね？

に話

この世界に生まれ変わって数年頑張つてやっとこさ成果が出てきた
身体能力これはまずまずと言った所だろう、ガキのカテゴリの中
では俺がトップクラスになってる、日々の積み重ねは大事だな早朝
トレーニングしててよかった

もう一つがクラピカ君ストーカー計画の案である、クラピカ君と仲
良くしようぜ作戦は驚く程うまくいってる

男の俺ですらびっくりするぐらい仲良くなった

早朝クラピカ君と一緒にトレーニング、終わったら一旦家に帰り朝
食をとる

その後クラピカ君と先生の所で勉強&体術、家の用事がなければク
ラピカ君と一緒に遊んだり、近くの森で冒険と言うなの脱出計画の
下見（街までの行方は未だに不明）

こんな感じのため四六時中一緒にいるのだ、最近クラピカ君が俺
を誘いに来たりする、子供に懷かれて嬉しい気持ちもあるがどう考
えても行き過ぎな気がするでもない

このまま行けばストーカー作戦は大丈夫かもしれない、順調順調

ここ最近先生の授業と平行に体術をクラピカの親父さんにも稽古
つけてもらっている、念は教えてくれないけどね

やはりクラピカ君のお父さんだけあってかなりのイケメンだ母親の
方も美形で、その両方の遺伝子が余す事なくクラピカ君に遺伝して
るうらやましい

クラピカの親父さんは俺基準だがかなり強い、子供の俺とクラピカ
君2人がかりで戦っても触れる事さえできない状態だ

近頃は素手の体術もそうだがクラピカ君の親父さんにはクルタ二刀
流と言う、クルタ族に伝わる少し短めの剣2本を使う剣技も存在し

てるため此方も習い始めた

これは曲者すぎる、1本でも剣を使う技術つてのは大変なのに2本共とも使いこなさなければならぬ、断言してもいい俺には向いてない

様になる程度にはやるつもりだがこれは限界が来るだろう、世の中には才能の壁があるのだよ現にクラピカ君は同じタイミングで習い始めた筈なのに俺より上手く2本の剣を使いこなしてる

いつも鍛錬が終わったらクラピカ君の親父さんはアドバイスしてくれる、性格もいい最高の親父さんだ鍛錬の最中は厳しいけどね

そんな感じで今を過ごしている、現在10歳旅団がこの村に襲来するまでおよそ後2年

死亡フラグを回避して上手く生き残った後の事も考えねばならぬ、正直何も思いつきません

ガキ1人で生き抜ける程世の中つてのは甘くないだろうしね、身体能力は一般人を越えてる事は越えてるしっす強盗にでもなるか？

子供強盗これは流行るかも……

無理か、まあ死亡フラグを回避した後にでも考えるか……

はい今日は生憎と外は雨

部屋でボーっとしてたらクラピカ君が遊びに来た

「何してるの？」

「何もしてないぞ、暇で死にそう」

「ならいい物持ってきたよ」

そう言うところクラピカ君は鞆からゴツい本を数冊取り出した

「父さんが先月街で買って来た本を持って来たんだ、父さんが読み終わったから僕が貰ったんだ」

「太い、まるで鈍器だな人殺せるぞこれ」

「面白いよこれ、アルベルに貸してあげる」

「うーんありがとう、ところでこれは何の本？」

淡泊な表情から一転、クラピカ君が笑顔になる
嫌な予感

「聞きたい？」

「聞きたいかも……」

やべえ失敗した

「アイジエンの大陸にかつて存在し高い文明を持ちながら滅びた二
ジェヒヤン族で使われてた文字やそこに生きてた人の生活を綴った、
とても面白い内容だよ！」

テンション上がって来やがった、クラピカ君は意外とこういうところ
で熱くなる性格もある、仲良くなって数年たって知ったがこうな
ったら止まらない

「で凄いのがさ、この風習の12歳になったら――」

「へえそうすごいんねー」

「ちゃんと聞いてよ！ で続き何だけどこの文字を見る限り――
――」

くっ、これは長くなるぞ！

「僕はこの時対立してた民族との交流で疫病が――」

もう一時間は立ちましたが止まりません

「――でアルベルはどう思う?」

「え? そ、そうだな大変だな」

急に話を振るなよ、全然聞いてなかったぞ

「聞いてなかったでしょ?」

「聞いてませんでした、ごめんなさい」

「全くアルベルはしょうがないな……もう一度話すから聞いててよ特別だからね!」

「えっ……エエエ……」

さらに一時間追加された

流石にこれ以上長引いても拉致があかないので真面目にクラピカ君の話を聞いて、何とか有り難い歴史のお話を終わらせる事に成功した

「ところで聞きたい事あるんだけどいいかな?」

「いいけど何?」

「なら聞くけど、アルベルは何で僕の事君付けで呼ぶの? 一緒に先生の授業聞いているみんなには付けてないよね?」

あれそう言えば何でだろう? 他のガキ共は呼び捨て何だが

「ねえ、何で?」

急に不機嫌になりやがった

「うーん何でだろう? 特に意識した訳じゃないんだけど」

「なら僕の事も呼び捨てでいいよ」

「え？」

「だから呼び捨てでいいってば」

なぜそこでムキになる、あれか友達なのに呼び捨てじゃないのが腹立つとかか子供にありがちなしょうもない嫉妬か？

コイツこんな感情まで持ち合わせていたとは意外と厄介なお子様だな

「はいはい今度からそう呼ぶよ」

「た、試しに今呼んでみてよ」

乙女か！

「わかったよ、クラピカ！ これでいいか？」

「う、うん、何か恥ずかしいね……」

珍しく顔真っ赤にしゃがった、これ何てクラピカ君ルート？ ないからそんな趣味ないから

「ついでだから俺も聞きたい事あるんだけどいいか？」

「え、な、なに？」

「街までの行き方知ってるか？」

「ごめんわからない、父さんにも街までの道順は聞いてないんだ、地図で見たら方角はわかるんだけどひたすら街まで真っ直ぐに行けばいいって物じゃないしね」

「そうか俺と同じくらいしかわかってないのか……」

当然か、迂闊に教えて好奇心旺盛なガキが血迷って街まで行く可能性もあるからな、道中に肉食獣や魔獣に襲われたら大変だし

「街まで行きたいの？ 子供だけで行くのは危ないし、自分の身を

守れるようになってからじゃないと教えられないって父さんも言うてたよ」

「わかってるって、ただ知りたかったただだから」

「ならいいけど……」

クラピカ君は原作もそうだったが鋭い人間だ、最近はその片鱗を見せてきて簡単な嘘ならバレてしまうから注意せねばならん

「なあクラピカ君」

「むー」

何だコイツ口膨らましてむーとか言いやがった、普段見せない変な表情に俺も鳥肌が立ってきた、男の癖に気持ち悪い事してんじゃねーよ

「な、何だよ、そのむーってのやめろ気持ち悪い」

「君”が付いてた」

「そんな事で怒んなよ、これから気を付けるって、なあクラピカ」
「それでいい」

ちよっと仲良くなりすぎた気がすると感じる今日この頃

に話（後書き）

クラピカの性格が……
なぜこうなった……

サン話

今現在バトってます相手13歳俺11歳2歳差ですがぶっちゃけ余裕名前はモブウ名前からしてモブキャラで覚える価値すらない別に喧嘩じゃないよ、体術の授業の一環で組み手してるだけだし

「ちょこまか動くんじゃない!」

モブウのすつとろい上段蹴りを伏せるように避け、そのまま足の下を抜け後ろに回る
振り向きざまの裏拳をバックステップでかわし距離をとる

「無駄無駄あ」

「真面目にやれ!」

真つ直ぐに俺に向かって来る、直線的で鈍臭い踏み込みに欠伸びが出そう

身長はモブウの方があるためリーチは俺よりあるがどうって事はない打ち下ろしの拳打を半身で避け、打撃は当たらないと悟ったのかあからさまに掴みにかかってきた

掴みかかってきた右手を払いのけ、胴に手加減した前蹴りをかます、一瞬モブウは怯むも果敢に突進、突っ込んで来る馬鹿の攻撃など容易く読めるのだよ

先程と同じように俺を掴みにかかる、右腕を伸ばし俺はそれを払うとした際にモブウが右手を引っ込め、左の打撃、フェイントだがバレバレなのだよ

打撃を回し受けの要領で受け流す

「貧弱貧弱う!」

「クソッ！」

とうとう頭にきたのか大振りのパンチしてきた、それをすっかり目で見て伸びきった腕をかくぐり懐に入る、顎に手加減した打ち上げの掌底を当てる

脳がいい感じに揺れ、モブウがぐらりと倒れそうになり隙だらけの状態になった

「貴様はチェック・メイトにはまったのだッ！ 死ねい！」

思わずテンションが上がる、がら空きのボディに渾身の力を込めた直突きをぶち込もうとした瞬間、何者かに手を掴まれた、いつの間に！

「何が死ねだ馬鹿者！」

「先生……」

「アルベル！ 何度も言ってるが冷静に行動せんか！」

「充分冷静だったと思うんですが、さっきもモブウの攻撃も全てかわしてましたし」

「そう言う事を言ってるんじゃない！ 罰として腕立て100回腹筋100回今すぐやれ！」

「……ういっす」

確かに調子に乗りすぎたようだ反省せねば

もう同世代のガキ共には負けないぐらいになった体術のみならクラピカにも勝てる、クルタ二刀流での勝負なら負ける

これは俺の欠点だな、武器を使ったら素手と違って間合いの取り方や体の動かし方まで変わってくる、いまいちそれに順応できない、つか才能がない

体術は先生や稽古を付けてくれる大人にはまだ勝ちが遠い、最近や

つとクラピカの親父（恐らく念なし）にかすり傷ぐらい与えられるようになったけど、所詮そこまでだ
壁が高すぎる、念の前に基礎を覚えないと糞ってのは理解したが、
流石に悔しい鍛錬あるのみか

罰の筋トレを終了したと思ったら先生が組み手の相手に俺を選んで
抵抗虚しく、簡単にしばかれた
体のアチコチが痛いクラピカに貰った薬を塗らねば、湿布臭いけど
結構効くから重宝してる
体の痛む箇所を確認していると、クラピカが近寄って来た

「やりすぎだよ」

「反省してるって、後でモブウにも謝つとくよ」

「ハア……」

「何だよ、ため息なんか付いて」

「何でもない……、薬塗ってあげるから服脱いで」

「自分でやるからいいって」

「いいから早く」

最近やたらお節介になってきたな、原作でもそうか微妙なダメ人間
風の初期のレオリオに世話焼いてたしな
脱いでやんよ、子供でムキムキのボディを見て魅了されな

「相変わらず頑丈な体だね」

「鍛えてるからな、これくらいクラピカ特性の塗り薬使って寝たら、
明日には治ってるし」

「ふふっ、あんまり無茶しないでよ」

何嬉しそうにしてんだよ気持ち悪い奴だな

「はいもついいよ、ちょうど薬がなくなりそうだし補充しとくから僕が持つて帰るよ」

「ありがとう、さてもう帰るか腹減ったしな」

「うん」

こんな感じで日々を過ごしてる、脳天気と言われたらそうかも知れないが打つ手がないんだからしょうがない、来るべき日まで出来る事は少ないのだ

街までの道のりはわかった事はわかったけど、無理つてのがわかったのだ伊達にクルタ族が秘境に隠れ住んでる訳ではなかった。たった一度だけ、クラピカの親父さんに頼んで大人達と一緒に街の用事にくつついて行っただけ

道のりがあまりにも険しい、街に付くまで猛獣や魔獣に数回出くわすし、体力的にも厳しいのだ

3日間山超え谷超え歩き続けねばならん、途中に魔獣などを警戒しながら交代を挟んで休憩仮眠を取りながら街まで進む、一人では100%無理だ街まで辿り着く前に死ぬ

クラピカが11歳になってもう3ヶ月すぎた、恐らく旅団襲来まで一年ないだろう

その期間体力作りのみに励んでもギリギリだ、だがクラピカストーリー作戦より確率が高いかもしれない
どうする決行するべきか？ 明らかに不可能なレベルだが悩むどころだ

もう時間がないな、こんな時こそ冷静になるべきだ混乱して空回りしてバッドエンド一直線はマズい

失態が多すぎる

一つは念を覚えられなかった事、これはかなりデカい念は身体能力

の底上げが出来るこれさえあれば街まで逃亡作戦が楽になっただろう
二つめは環境に慣れ、クルタ族の皆に情が移りすぎた事だ、心つて
のはどうしようもない、頭では見捨てる事前提で進めてるが如何せん
罪悪感かなりある、人間非情になるのは意外と難しい

実際クルタ族が皆殺しされた時それを見たらどうなるか自分でもわ
からない、想定外な事が起きる可能性もある

3つめはクラピカと予定以上に仲良くなりすぎた事だ、二つめの失
敗と似てるが意味合いが違う

ストーリー作戦の後俺とクラピカが生き残れば、クラピカは原作通
り蜘蛛抹殺に人生の大半を注ぐだろう

そんなデンジャーな奴に付いて行くつもりはないし、物語の原点【
ハンター】になるつもりもない

クルタ族同様にクラピカは見捨てる気満々だったけど、今は実際そ
うなったら見捨てる事が出来るかどうかはわからない

甘いと思うかもしれない自分でもそう思ってる、だが如何せん感情
が爆発しそうな感じだ

鍛錬でもどうにもならん、精神面は人間鍛えようと思ってても難しいな
まあなるようになるか……

サン話（後書き）

次回で話しが進みます

よん話

屍 屍 屍 屍 屍 屍 屍 屍 屍 屍

狂いそうになる、吐き気が止まらないこれが人間だった者なのか
人の形さえしてない腹から内蔵が飛び出し死んでいる、頭が潰され
グチヨグチヨのスープみたいなのが倒れこんだ地面を染める死体

赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤

狂いそうになる、子供も大人全てが平等に死が訪れ全てを赤色に染める

目の前には誰かの胴体が転がり、上から先は誰だったのかもわからない死体

曲がってはいけない方向に関節を曲げ悲痛の形相をしている死体
どれもこれも壊れている、全てに死体には目玉がない、目があった
はずの部分はポツカリと窪み眼底から流れる真っ赤な涙が顔を赤く
化粧している

「あああああああああああああああああああああああああああああ
！」

少年の1人が叫ぶ魂から絞り出したかのような慟哭、怒気、悲痛、
呪詛

感情のすべてが混ざりあった吐き出す言葉は獣のような鳴き声

俺は動けない全身が震え、脳がフリーズしたように停止し腐ったか
のように何も考えられない、響き渡った少年の叫びさえ耳まで届か
ない

ただただこの目の前に広がる血の臭いが充満した地獄に囚われるだけ

「アアアアア！！」

クラピカの叫び声をあげ、もつれる足を懸命に動かし前に進む姿が俺をかすかに正気を取り戻させた

「ク、クラピカ！」

「父さん！ 母さん！」

クラピカが大切な家族がいるはずの我が家に向かう

クラピカの戸惑いが見てるこちらにも伝わってくる、涙でグシャグシャの顔を見て、なぜか俺は混乱していた脳が正常に戻る

冷静になれ冷静になれ！

心臓の鼓動が世界中に聞こえそうなぐらい高鳴っている、落ち付けまず深呼吸しろ

10回程深呼吸をし目を瞑る五感の一つを消した事で、嗅覚が無駄に研ぎ澄まされむせかえるような生々しい血の臭いが俺の鼻孔を抉るように感じられる

「ふうー……」

最後に大きく息を吐き出し、この現状を判断するわかっていて、何時かこんな日が来るとは理解していた

耐えられないこれ程までにキツいのか、口の中が胃液で満たされ今にも胃の中の物を全て吐きそうになる

こころせいしんが壊れ崩壊する

確かにこれは歪んでもおかしくない激情で身が焼かれそうになる
取り敢えずクラピカを追わねば、今後どうするか今は決められない

始まり

「おいクラピカ！ 本当のところ辺りにあるのか？」

「多分」

「オイ、多分かよ」

とうとうクラピカが先月、12歳になった内心ビクビクだ
街に逃げるとか無理、あれから体力を重点に置いて訓練したがビツ
クリするぐらい無駄だった

最後に残った案クラピカストーカー作戦が俺の生命線だ、もう自分
でも気持ち悪いぐらいクラピカに引ッ付いている
別にクラピカは文句言ったりしてこないから複雑な気分だ、いつそ
気持ち悪いって言うてくれればいいのにね

「もつと森の奥にあるんじゃないか？」

「どうだろう？ ここにはなさそうだから行ってみようか」

今何してるかと言うと、クラピカが母親の誕生日が近いからその
プレゼントとして特別な物をあげたいと言うので、常時くっ付いて
る俺をお供に森まで探しに来た。

お目当ては花火花はなびはなと言う特殊な花で時折花粉が火花のようになるら
しくそのさまはとても美しく、めった見つからない希少な物らしい
クラピカが過去に村から父親と薬草探しに出た際見かけた記憶を当
てに協力して搜索中

「流石に村から離れすぎたんじゃないか？」

「ごめん、でも母さんの誕生日は明日だから今日中に見つけないと……」
「まあいいけど、日が暮れる前までだぞ、おばさん達を心配させたら意味ないしな」
「わかってるよ」

どこか沈んだ面持ちのクラピカの背をポンッと叩く

「大丈夫だって、俺も探してんだし見つかるって」
「ふふっ、ありがとう」

「この辺りはもう探したから、少しだけ奥に進むかここから村の距離だと走ったら30分ぐらいで付きそうだし」

「そうだね」
「よし行くぞ」

あんな事言ったが、心の中では見つからないだろうって思ってる離れたと言ってもここらあたりはまだ村のテリトリーだ

探す前にどういう物か調べたが結構な値がするため、既に大人が刈り尽くして街で売った可能性も高い

見付かれば御の字だな、クラピカの母親には世話になってるしな

結局俺とクラピカは日が暮れる寸前まで探したが、目的の物は見つからなかった

何かいたたまれない気分だ、ないものはしょうがないしどうしようもないのだ

少し離れた場所のクラピカに声をかける

「おーい！ もう見つからないから帰るぞ！」

森の中に俺の声だけが響きわたる、なぜかクラピカの返事が聞こ

えて来ない

「クラピカー！」

「ア、アルベル！ こ、こっち来て！」

「いたのか、ちゃんと返事しろよビックリしただろ！」

クラピカの声がする方に駆け寄る

そこで見たのは、一瞬声を失ってしまうぐらいに美しいものだった花がまるで線香花火のようにパチパチと音を立て夕暮れの光がありながらも、力強く火花を放っている幻想的な光景に思わず見とれてしまう

「……すげー」

「……うん」

「どうするこれ？ 持ってかえるか？」

「いいや、母さんには違う物渡すよ」

「だな……」

クラピカは優しいね、俺単独なら問答無用で持っていくんだがクラピカがこういうなら仕方ないか

「やべ！ 日が暮れるぞ」

「急いで帰ろう！」

俺達は二人村まで駆け出した、収穫がなかったにもかかわずクラピカの笑顔はどこか満足げに微笑んでいる

俺達が村に辿り着くまでクラピカの笑顔は消える事はなかった
そう村に辿り着くまで、クラピカは何も変わらない日常がそこにあると思つて

よん話（後書き）

旅団襲来ということでこんな感じになりました

さすがに目玉えぐってクルタ族皆殺しイベントはコメディにはできませんでした

後2話ぐらいシリアス（笑）になってしまいますので苦手な方申し訳ありません

また直ぐに1〜3話みたいな感じに戻りますので

ギョ話

クラピカが死んだように眠っていた、寝ているその顔は安らかとはほど遠い、時折呻くように声をあげ苦悶の表情を浮かべている。

クラピカと俺が村に帰ってきた後、クラピカは村の広場や道に転がる大人達や昨日まで一緒に学び遊んだ子供達の死体を見て狂ったように叫んだ

転がった死体を見ないように脇目もふらずに走り出した
家の傍にそれはあった

クラピカの父親は母親を庇うように倒れこむ無残な姿だった、人間の尊厳を踏みにじりボロボロにされ両目を抉られ死んでいる
最愛の家族の変わり果てた姿を見たクラピカは、再度叫び意識を失ってその場に倒れこんだ

俺はクラピカを抱え家まで運び布団に寝かせる、ソツとクラピカの頭を撫で外に出た

俺はいないと思いつつも生き残りがいないか村を歩き回った
死んでいる

この世界の色々な事を教えてくれた先生も
俺を育ててくれたおばさんも
みんなみんな死んでいる

罪悪感で胸が押し潰され壊れそうになる
知っていたから俺はこの結末を知っていながら見捨てた

「……チツ」

俺は何を考えた？ 助けられると思ってたのか？

俺如きに何が出来たんだ、原作知識ひけ散らかせて原作を壊す？
助ける事を面倒くさいとか思ってたくせに？

軽く考えてすぎてたのかもしれない、もし自分なら耐えられるとか楽観的に考えてた

甘かった、めちゃくちゃだこれ程にキツいのか？

もう遅い何もかも遅い……

「ハア」

溜め息を吐く

取り敢えずみんなを埋めよう、このままじゃああまりも惨すぎる
今出来ることはそれだけだ、謝罪とかじゃない自分がやりたいから
やるだけだ

クルタ族のみんなが使っていた、農作物を作るための用具がある小屋
屋に行きスコップを持ってくる

スコップを片手に広場まで行き穴を掘る作業に取り掛かった

手が痛い俺は何時間穴を掘っていたんだろ、空を見上げたもう夜が
明けそうだ

早くみんなを埋めないとダメだ、クラピカにこれをやらせてはいけ
ない

掘った穴から出てスコップを投げ捨てる

まず広場にある死体を一カ所に集めた、吐きそうだ今みんなの亡骸
を物を扱うようにした俺に

「すみませんでした」

なぜ謝ったのか自分でもわからない咄嗟に出た言葉がそれだった
みんなが俺を見てる気がした、腫がない筈なのに怖いと思っ
てしま

感情を消しみんなの亡骸を淡々と埋める、泥と血の鉄の匂いが纏わりつく

作業に没頭していると不意に後ろに気配を感じ振り向き振り向いた先にいるのは、目が虚ろで今にも倒れそうなクラピカだ俺クラピカにどんな言葉をかけていいのかわからない、ただクラピカを見ているだけ

「……みんなはどこ？」

弱々しくそう呟く声が俺の耳に届いた
答えられない正解がわからないから

「……ねえ、答えてよアルベル」

俺はクラピカに近付きクラピカに言った

「寝てろ」

何を言ってるんだろうか

「答えてよ、アルベル！」

「落ちて着け答えるから、取り敢えずお前の家に行くぞ」

何か言いたそうなクラピカだが黙って俺に付いてきた

クラピカの家にあがるとまずクラピカを座らせ、その正面に俺が座る

「何か飲むか？」

「いらない……」

「そうか……」

暗い雰囲気だ、重い空気が俺とクラピカにのし掛かる
何て言ったらいいものか……

「みんな死んだの？」

クラピカがピンと張り詰めた空気の中発言する

「……ああ、皆死んでた」

「誰が？ どうして？」

「わからない……」

嘘を付いたそう言った方が良いと思ったから

「父さんと母さんは？」

「広場だ……、まだ埋めてない」

「そうなんだ……」

「あとは俺がやるから、見ない方がいい、寝てろよ倒れそうだぞお前」

「……いいよ、手伝う」

「いいから寝てろ」

「僕ならもう大丈夫だから……」

強がりを言うクラピカが痛々しい、見てられない

「わかった、なら頼む」

「……うん」

二人で広場に行き、黙々と皆を埋める
村中にまだある亡骸を集める事は俺がやった、クラピカにさせたく
なかったから

クラピカが自分もやると言い出したが、役割分担だからと言って広場に留まらせた

ずつと取るものも取らずやっていたから喉が乾いた、不思議とお腹は減らない

飲み水がある場所に行く、水がはつてある大龜の中をのぞき込んだら俺が写っていた

これが俺か？ 目元には隈が吹き服も泥と血が変色し真っ黒になった物が全身に付いている

……気持ち悪いな俺

頭をかこうと手を挙げたその目に映った俺の手は服と同じように真っ黒だった

ギュツと手を握り締める、血の匂いがする

もう一つの甕に手を入れゴシゴシと手をこすり合わせる

「血ってなかなか取れないんだな」

クラピカ

目が覚めた、何時も道理の天井を見上げる

昨日の事は夢だったのか？

最悪の夢だったアルベルと森から帰ってきたら

みんなみんな死んでいた、父さんも母さんもみんな死んでいた

「おはよう」

自分の部屋から出て何時ものように家族に挨拶する

返事が返って来ない、毎朝自分より早く起きている母さんと父さんがそこにはいなかった
ガランとなったテーブル、作りかけてそのまま放置したように乱雑に置かれた食材が調理場にあった

「あれ？」

僕は不安になって父さんと母さんが寝ている部屋を覗く
やっぱり誰もいない

まさか

嘘だ

嘘

夢じゃなかったの？

なら外にあれがあるはずだ、昨日見たアレが

家から飛び出し、外の光景を見て気を失いそうになった

父さんと母さんはいない、それでも夢じゃなかった事を強引に知らされる目の前の現実

壁に叩きつけられ放置された死体、あちらこちらに散らばる人だった物

「アルベル？」

大事な友達を思い出し言葉に出す

アルベルまでいなくなったら、僕は僕は……

隣の家に駆け込む

おばさんもアルベルもいなかった……

怖い世界にだれもいない一人ぼっちになった気がした

足が重いゆつくりと歩く行き先は広場、朝はよくアルベルとあの場所に行くから
もしかしてアルベルがいるかもしれない、もしいなかったらどうしよう

そんな事考えながら広場を見渡せるところまで行くと
広場はいたるところに土が盛られ、地面が掘られていた
その一角で何か動く物を見つけ目を凝らせてよく見ると、アルベルがスコップで地面を掘っている姿だった

アルベルに急いで駆け寄りたかった、でも無理だった
アルベルの近くにこの距離でも嫌でもわかるくらいに無造作に置かれた、みんなの亡骸
何をしてるのか何をしようかなんてわかってる、アルベルはみんなを埋めてあげようとしてるんだ
震える足を無理矢理動かしてアルベルの元に急ぐ

アルベルが掘った穴から出てきて、僕の気配に気付いたのかこちらに振り向いた

何時ものアルベルなら、不自然な笑顔を浮かべ僕にくだらない事や憎まれ口を叩くだろうが

今はただ僕をジッと見てるだけ

アルベルの服は泥や血で真っ黒に染まり、目は充血し隈ができ疲労が貯まってるのがわかった

タフなアルベルがこんなになってるのが信じられなかった、どれくらいこの悲しい作業を独りでやっていたのだろうか？

ごめんなさい、そう言いたかった

でも僕の口から出たのは別の物だった

「……みんなはどこ？」

違うこんな事を言いたかった訳じゃない

アルベルは目を細め俯いた、すまなさそうにするアルベルの顔を見て自己嫌悪する

「……ねえ、答えてよアルベル」

ごめんなさい

アルベルが僕に近付き弱々しく呟く

「寝てろ」

こんな時にまで僕の事を心配しているのだろうか？

「答えてよ、アルベル！」

「落ち着け答えるから、取り敢えずお前の家に行くぞ」

あとを付いて行く

無言で前を歩くアルベルが僕には別人みたいに見えた

僕にとってアルベルは友達であり、産まれてこの方ずっと一緒にいたから兄弟みたいに思ってる、笑っちゃうけど頼り無い兄って感じだ何だろ言葉には言い表せない別人のように思えてしかたなかった

僕の家が付くと促されるまま椅子に座り、テーブル越しにアルベルが正面に座る

アルベルからみんなや父さんと母さんの事を聞いても

信じれない程今の僕は落ち着いている、多分アルベルのこの顔を見たからかもしれない

どこを見ているのかわからない、僕を見てるようで見ていないどんよりした瞳

僕はバカだ、混乱してアルベルをせめて何をしているんだえろう
アルベルは僕を心配して手伝いを断ったんだ、でもこれ以上僕はアルベルに苦勞をかけたくない
見てもらえないからこんなアルベルを……
友達だからもう僕にはアルベルしかないから

「僕ならもう大丈夫だから……」

渋々アルベルが頷くと、2人で広場に向かいみんなを埋葬する
埋めてる最中、僕の中に沸々と煮えたぎる感情があった
クルタ族の誇りも何もかも踏みにじり汚しただ奪い、殺した人間
此処まで惨い事が出来る人間がいるとしたら、僕はそれを許せるの
だろうか？
わからない……

今はみんなを埋めてあげよう
それからの事はアルベルと相談して決める
でも一つだけ決めた事がある
――強くなろう

ろく話（前書き）

今回の話は自分で書いておきながらめっちゃくちゃです
突っ込まれてもすみませんとしか言えないです、はい
話しも進んで進んません

ろく話

クルタ族が俺とクラピカを残し滅びた日からおよそ1カ月の月日が流れた

俺も大分落ちき、広場に花を飾り付け供え、クルタ族のみんなを弔った、生憎お経何て知らないしクルタ族にそんな習慣はない、手を合わせ祈るだけしか出来ない
今も広場に花を植えている

自己満足なのはわかってるんだけどね

あれから村はそこそこ綺麗になった、クラピカと協力して村のあちこちを清掃し、ここで村人が大量虐殺された場所とは思えないくらい片付けた

流石に壊された民家などは直せないから放置してる、そんな技術は俺にもクラピカもないから

それに俺は今ここに留まるかどうか迷っている

俺の【目的】はここでは達成できない、だからこそ迷っている
俺の目的にはクラピカが必要だし、情も移った見捨てるつもりはこれっぽっちもない

当初のクルタ族として生活してた時とは、俺の思考は全く別物だ、生き残った後好きなようにこの世界を楽しむこれの優先順位が変わっただけ

だから今は下手に動けない、理由はクラピカだ

クラピカの過去は原作でもH×Hの主人公ゴンと出会っ前どういった生活をし、どういった経緯でハンター試験までたどり着いたかが書かれておらず一切不明

懸念となるのはそれだけじゃないクラピカは今現在、クルタ族を滅ぼしたものが誰かすらわかっていない

これは俺の存在で歴史が変わったとは考えたが正直微妙

俺がいらないとしてクラピカがクルタ族滅亡が発生し生き残り、村に帰った後辛うじて生きていた瀕死の人間からこれを行ったのは幻影旅団と聞いた、だがこれは有り得ない

闘い負け目玉をえぐり出された人間が生きていたとは思えないからだ
女子供も容赦なく、ご丁寧にトドメまでさしてやがるし

ならどこでクラピカは幻影旅団の事を知った？

クルタ族以外の第三者から聞く方法しか残されていない、ならどこで？ 誰に？ クルタ族が滅ぼされた事を知っているうえ、これが旅団の仕業と知ってる者？ そんな奴がいるのか？

情報がなさすぎる、所詮俺の想像でしかない

クラピカ行動を考えてみるか……

俺がいなかった場合、クラピカはどう動く？

まずクルタ族滅亡が終わった後、暫くここに留まり今と同じようにクルタ族のみんなを埋葬するだろう

問題はその後だ、この戯劇を引き起こした犯人を突き止めようと行動するだろうか？

俺の推測だと時間を置きクラピカは行動に移すはずだ

俺に黙ってはいるが怒りを心に秘めている、ただその怒りのぶつけ先が定まらず考えが纏まっていけないだけ、どうするか決まったら行動を起こすのは間違いないと思う

もしクラピカの考えが纏まり戯劇の犯人を追おうとして街まで下りる、これは現状不可能

クラピカには街まで単独で下る程の体力はない、しばらくこの村で

体を鍛えてこの場所を出る事になるとか？

仮に街においてその後どうする？職もない稼ぎもないガキがそう簡単に街で生活は出来る程甘くない、ストリートチルドレンにでもなるのかクラピカが？

有り得ないあまりにも計画性がなさすぎる

うーむ……わかんねえ

関係なくね？ クラピカの原作までの人生の道乗りとかもう関係なくね？

ダメだダメだ、少し思考がおかしくなった、落ちつかねば

ん？ 待てそうか、クラピカが街まで行かずに幻影旅団の情報を聞ける方法はある

先入観に捕らわれていた、可能性があるじゃないか、ゼロではないんだ……

この村に誰かが訪れる可能性が、クルタ族として12年この村にいたがこの場所にクルタ族以外の人間は来なかった

だから頭から無意識に外していた、ありえなくはないんだ現に幻影旅団は現れた

ならそれ以外の人間が来る可能性はある……

だがそんな人間がここに来る理由はなんだ？

1、幻影旅団と同じ理由？

ありえなくはないが可能性は低い、もしそんな人間が来たらクラピカは原作に存在しない

2、何らかの調査で偶然立ち寄る？

今さらこのタイミングでクルタ族の集落の近くまで来る可能性はあるのか？

何か引っかかるぞ、見落としては何だ？

俺は鞆から、原作知識を書き綴った手帳を取り出し、幻影旅団の項目を読み直す

「ーこれか

だとしたら第三者が幻影旅団が殺したとは分らないものの、クルタ族が全滅したと推測する人間が現れるかもしれない

かなり低い希望的観測

クラピカの原作のあれに対する崇高のような考え

合点とまで行かないが、あるかもしれない

賭けるか？ この可能性に……

「ふうー」

溜め息が増えたな笑えないぞ、弱気になってる証拠か

俺は弱気になってる暇はない、思考しろ考える事をやめるな

つい頭をかきむしつてるとクラピカが俺に声をかけてきた

一月前よりクラピカは少したが痩せてしまった気がするな、だが目からは決意を持った強さが感じられる

「手伝う事ある？」

「いいよ、こっちは終わったから」

「そつ、ちょっと休もう」

広場で俺がやってた花を植える作業を手伝いにきたんだろう

俺とクラピカは広場にの片隅に行き腰をおろす

「アルベル……」

「どうした？」

「これからどうするか話し合おう」

「わかった」

いよいよか……

「クラピカはどうしたい？」

「僕は……みんなを殺した犯人を許せないんだと思う……」

ここは僕達の大事な場所だけど、ここにいても答えはないと思うから」

「それで」

「街まで行こうと僕は考えてる、アルベルは？」

やっぱりか…… 案外早かった、どうする？ ここに来て俺の存在が弊害を生んだかもしれない

「俺も同じ意見だけど、まだその時じゃないと思う

ここで街まで2人共単独で街まで行けるようになるまで鍛えるべきだ」

「それだと、食料の問題とかどうするの？」

家畜はあの時の騒ぎで全部逃げちゃたし、食料庫にある物を使つたとしても

もって2カ月、森の中で狩りをして過ごすにしてもいずれ限界が来るよ？」

そりゃあそうだ

俺は賭けに出てるから今のところ、ここから離れるつもりはないこれはクラピカのためでもある

どうやってクラピカを説得する？ いっそ土下座するか？

「アルベル？」

「クラピカもわかってると思うが、俺達2人だと街までつく前に死ぬぞかもしれないぞ」

「勿論わかってるよ、だけど……」

「クラピカの気持ちは分かる、だけど今は無茶をしないで欲しい、せめてお互い協力して街まで行けるくらいまで鍛えよう」

クラピカはぐつと拳に力を込めている

「……」

「頼むクラピカ、俺はお前を失いたくないお願いだ」

初めてかもしれない、クラピカにこうやって真剣に頭を下げるのは

「アルベル」

「頼む」

「顔を上げて、僕もアルベルを失いたくないんだ
気持ちは一緒だよ、鍛えようまた2人で一緒に」

頭を上げクラピカの顔をじっと見た

「でも約束して欲しい、いずれここから出るって」

「ああ、約束する」

クラピカが俺を観察するかのように見た後、ゆっくりと立ち上がった

「何だよ」

「フフツ、何でもない」

久しぶりにクラピカが笑った

「つか腹減った」

「今日はアルベルの料理する番なんだから作ってよ」

「はあ？ クラピカが作れよ、俺料理苦手だぞ、前作ったらマズいって言うてたろ」

「順番は守るべき」

「わかったよ、変な物作ってしまうかもしれないから、お前も手伝ってくれ」

「しょうがないな、まったくアルベルはもう……」

「何だその言い方ふざけるんじゃないよ、ワザとマズい物作ってやるのか？」

「はいはい」

「こ、こいつ……」

「早く行こう、時間がもつたないからね」

「ぐっ、わかったよ行くぞ」

「うん」

少しだけ前の日常が戻った気がして俺はホッとした

これでいい何とか目的は達成できた、クラピカを失いたくないのは本心だしな

多分だが俺の存在が原作前とはいえ弊害が出て時間が歪んだ

おそらくだがクラピカの行動と気持ちの整理が早くなったはずだ

俺がいなかったら皆を埋める作業、村を綺麗にする作業、皆が死に感情もままならない状況でこれを1人でやったら、倍の日数はがかかったはず

だから合わせないといけない時間を、俺が賭けた博打に勝つために俺が賭けるか博打は手帳の幻影旅団の行動を読んで思い付いた事だ

『団長は一頻り愛でると全て売りはらう』

そう、幻影旅団は盗品は全て売り払うのだ

盗品を全てだ、クルタ族の緋の目も例外ではない全てだ
どういったルートで売り払われるのかわからないが、数十人分の眼
球を売ったら間違いなく異変に気付く者も出てくるはず

その原因を調べる者がいたとしたら？

馬鹿な考えだこれは推測でもないただの都合のよすぎる妄想にすぎ
ない

もしここに「ハンター」またはそれに通じる者が来ると言う妄想

クルタ族という特殊な民族の事を知り、ここまで来れる知識と身体
能力

これは俺の希望であまりにもアホな希望的な物だが、これに賭ける
原作でクラピカが死なない事実、クラピカが原作で見せたハンター
の崇高な思い

クラピカの崇高な思いはどこで見聞きしたか？ その場にハンター
がいたのではないかという妄想

馬鹿みたいだが、俺はこれに賭けた

あまりにも今の俺達はジリ貧だ、今の所街に行けない以上、俺とク
ラピカは動けないなら鍛えクラピカの本来の時間軸まで賭けて待つ

まあ来なかったら来なかったでしょうがないさ、次の事を考えれば
いい

ろく話（後書き）

今年の更新はこれで最後です
正月はバタバタしますので更新は遅れます
それではよいお年を……

ナナ話

左からの木刀の一振りを寸でかわし、アルベルは距離を詰める手加減なしの左の手刀をクラピカの首目掛けて突き出す、わざとなのか寸前でクラピカはそれを軽く避け、伸びきった腕が戻りきる前に、右手に持つ木刀でアルベルの脇腹を叩きつけた

「グッ！」

アルベルはクラピカの追撃を危惧し後方に大きく飛び退く

「甘い！」

それを予期していたのかクラピカが前進し、木刀の間合いを生かした左からの突きを放つ

先ほどの脇腹のダメージのせいでアルベルはうまく体を動かす事ができず、木刀の先端がアルベルの腹部にめり込み表情を歪ませる

「ツウ、ガハッ！」

痛みで膝を付きそうになるのをこらえ、一歩踏み込み自分の間合いに入ろうとする

が、すでにクラピカは右手に持つ木刀をアルベルの首に添えていたアルベルは勝敗を理解し両手を上げる
やや遅れクラピカが両方の木刀下ろした

「僕の勝ちだよね？」

「あーちくしょ、素手なら勝てるのに……」

「得意な武器を使うのは当然だよ、アルベル」

フンと鼻をならし自慢気に俺に言うてくる

くそ、コイツ性格曲がって来てないか？ 昔は俺に殴ったりする事すら躊躇したり、すぐに謝って来たりしてたのに

これが成長か……

村からちよつと離れた修練場でクラピカと組み手をしていたが、俺は何度も負けている

さっき言った通り素手なら負けないんだがね！

「もう一回だ！」

負けてられないのだよ！ こちとらプライドがあるのだ！

「いいよ」

なにその余裕？

「ぬわあああ！ パアパアスウウ！」

雄叫びをあげ俺はクラピカに飛びかかった

負け越しました、7戦1勝6敗

1勝はクラピカのスタミナがなくなつて勝てただけだから、全然嬉

しくない

ダメだ勝てない、真剣を使わず木刀を使っていたが、本来の得物の真剣を使ったら俺は全敗していただろう

「イタイツ、優しく塗りたまえ！」

「はいはい、まったくもう……」

で、今俺は半裸でクラピカにクラピカ印の塗り薬を、背中の中の間に怪我した部分に薬を塗ってもらってる
ちよつと気持ちいいと思ってしまう自分がイヤだ……

「はい、出来上がり」

「おう」

脱いでいた服を着て立ち上がる、体が痛い

「アルベルってさ、もうちよつと闘いながらも周り見た方がいいよ」

「注意散漫って事か？」

「うん、アルベルは避ける事に専念するあまり
位置的に不利な場所に追い詰めやすいんだ、僕が武器持つてる優位性もあるけど」

「もしかして俺の動きって読みやすいのか？」

「そんな事はないと思う、ずっとアルベルと稽古してるから動きのパターン覚えてただけだよ」

コイツ、サラツとんでもない事言いやがるな、俺とばかりやってるとは言えそんな事出来るって凄い事何じゃね？

やはり原作での天才っぷりはマジ物か…

「アルベルも何か武器使ったら？ 避けるだけじゃなく、受けを使えたら戦闘に幅が出るよ」

「武器ねえ……」

使いこなせない物を使うのはね、逆に混乱しそう何だよな
とりあえず後で倉庫を漁ってみるか

「戻るか、日が暮れちゃった」

「うん」

修練場からクラピカの家に戻る最中とある異変に気付く、村の入り口から近い民家に灯りがうつすらともっている

クラピカも気付き警戒するように目を細め、腰に差していた木刀を抜き、ギョツと手に握りしめた

クラピカの雰囲気が変わる、軽い興奮状態になったのか瞳がゆつくりと真つ赤にそまり、緋の眼に変わる

俺の賭が勝ったのなら、侵入者とのイザコザは控えないといけない、クラピカを宥めねば

小声で話しかける

「落ち着け」

俺の言葉がクラピカの耳に届いていない、灯りの付いた民家をジッと睨み付けている

憶測だが、クラピカの頭の中であの日の懺劇がよぎったのかもしれない、トラウマになったからしょうがないとはいえ、今は不味いクラピカを何とか落ち着かさないとダメだ

俺はガシツと片手でクラピカの頭を掴み、強制的に俺の方を向かせる
クラピカがハツとした表情になり、戸惑った様子の顔で俺を見る

「クラピカ」

「ア、アルベル……」

「大丈夫だ、俺は傍にいるだろうが、どこにもいからねーから」

なるべく優しくゆっくり喋り、クラピカを真っ直ぐ見て伝えた
スツとクラピカの瞳の色が元に戻って行く

はあ良かった……

「だから落ち着け」

「……ごめん」

「気にすんな」

クラピカが掴まれた頭がくすぐったいのか、顔をプルプルと揺らす
俺も流石にやってる事が気持ち悪くなって手を離れた

「あっ」

何、名残惜しいみたいな顔してんだ気持ち悪い奴だな、ぶっ飛ばすぞ

「何だよ、落ち着いたなら何か言えよ」

「えーと、どうしようか？」

「まあいい、あの家に誰か居るのは間違いないだろ」

「そうだね、あそこは僕達使ってなかったし」

どうする？ クラピカにあそこにいるのは敵じゃないかもしれない
から行こうぜ、とは言えん

だが何としても接触する必要がある、しかしクラピカにどう言えば
いい？

仕方ない俺1人で行くか？ もし賭けに負け敵だった場合どうする？

埒があかないどちらにせよ会わないと確認しようがない、行くか行くしかないか

「アルベル」

「どうした？」

「僕は接触は避けるべきだと思う、この集落に人が来る事情がわからない

もしみんなをあんな目に合わせた奴がここに戻って来たのなら僕達の命はない

信じたくないけど、父さんや大人の人達に勝ったぐらいだし、

到底今のアルベルと僕じゃあ何の抵抗もできずにやられるのが落ちだよ、

悔しいけど今だけここから離れよう」

マジ？ 原作クラピカなら問答無用で突っ込んで行きそうなんだが

……

とんでもなく冷静に判断しやがった、しかもかなりの正論だし

俺の存在でクラピカの思考の方も変化したのか？

「ちょ、ちょっと待て」

「何？」

「俺は接触するべきだと思う」

「どうして？」

どうしよう？

「勘……」

「はあ？」

「だ、だから勘だって」

「何言ってるの？」

クラピカがお前何言ってるの？ 死ぬの？ って言いたげだ
仕方ない強行策だ

「俺が1人で行ってくる、ここで待ってる」

なぜかクラピカが下を向き全身をワナワナと震わせる
顔をあげカッと目を見開き俺を怒りの形相で睨む、その瞳は真っ赤
に染まりまたもや緋の眼の状態になっていた

「ふざけないでよ！ アルベル！」

「えっ？」

クラピカが村中に響くような大声で怒鳴り始めた

「1人で行くって何だよ！ 僕の傍に居るって言ったばかりなの
に……、

それに！ もしアルベルになにかあったらどうするだよ！ そんな
事になったら、

アルベルまでいなくなったら、僕はぼくは……」

クラピカはひとしきり怒鳴り終え後、うつて変わって落ち込み出した
やっちまった、クラピカがここまで俺の事を心配すんのか……
予想出来なかった事じゃなかったんだが、単純に俺のミスだ

「すまん、クラピカ俺が悪かった」

クラピカに頭を下げる

「あつ、こんな時にこっちこそごめん」

「いって」

何か変な空気になっちゃった、どうしよう……

あれ？

何か視線を感じる

視線を感じた方向に目をやると、数人の人間がこちらを見ていた
そりゃあそうか、あんなにデカい声出してたしな

ナナ話（後書き）

次の話しでオリキャラが出ます
何かクラピカがおかしな事になって来た……

はち話（前書き）

オリキャラ難しいです

はち話

博打は俺の勝ちだった。

有り得ないぐらいの大勝ち。

気味悪いな、クルタ族に生まれ変わって、世の中そんなに甘くないって、現実を叩きつけられたばかりだ。

勘ぐるのは当然か、ご都合主義だから、ですんだらいいんだけどね。クラピカの家の一室で、そんな事を考えていると、ゆっくりと扉が開き、クラピカが部屋に入ってきた。

「夕御飯できたよ」

「おう」

クラピカの後を追って部屋を出ると、そこには男が2人いる。

出会ってまだ3日しか立ってないのに、堂々とした姿でくつろいで、クラピカ手作りの料理を食べている。

1人は身長2M以上ある筋骨隆々の大男だ。顔もめちゃくちゃ怖い、睨まれたら逃げ出しそう。

もう1人はこの場にそぐわない、目が痛くなるぐらいの明るい紫色の上下のスーツに紫色のハットを被った男だ。

なぜか、俺を見て薄気味悪い笑みを浮かべている。

「アルベル君、申し訳ありません。お先させてもらっていますよ」

「いえ、自分の事は気にしないで下さい。テルミさん」

全身紫の男がテルミ。

丁寧な物腰と話し方をして、一見好青年って感じなのだが。表情があまり変わらない、常に顔に貼りついたような笑顔が気味が悪い。正直この人にはまだ警戒がとけない、不思議な事だが、俺を観察し

てる節があるんだよな。

それに初めて会った時、俺を見て能面のみたいな顔が、ほんの一瞬驚いていたように見えたのだ。

「早く座らんか、嬢ちゃんが作った飯が冷めてしまっぞ」

「はい、あとクラピカは男ですよ。バレチノさん」

「……ああ、そうかスマンな」

巨体で髭面のオッサンがバレチノだ、口汚くなる時もあるが悪い人ではない。顔怖いけど。

俺も料理の置かれているテーブルの席に座る。

「クラピカ、いただきます」

「うん」

出された料理を一口食べる、相変わらず美味い。

俺の代わりに、毎日作ってるからな。

最初は交互に作ってたけど、俺がサボりまくってたら、自動的にクラピカが料理係りになっていた。

たまに文句言ってくるが無視、俺には料理の才能はないからな、無駄な努力はしないのだよ。

何だかんだ言っても、キッチンと作ってくれるし。

しばらく4人で黙々と食べていると、クラピカが箸を置き、バレチノの方を見る。

「バレチノさん、話してください、父さん母さんみんなを殺した人の事を、

今まで言ってくれなかったですけど、知っているんですよね？」

クラピカの嘘は許さない、といった視線に、バレチノは箸を止めてクラピカの目を見返した。

「気付いておったか、鋭い子供だな」

「はい」

バレチノは僅かに眉間にしわを寄せ、一度小さい溜め息を吐き言う。

「わかった、その前にせっかくの料理を食べ終わってからにしよう、気分がいい話じゃないからの……」

「……わかりました」

やっとか、やっとか先に進むのか。

原作前の話しがわからないとは言え、こんな賭けに出たんだ。

負けた事も想定して色々考えていたが、本当によかった、無駄になつて。

俺の馬鹿げた妄想が、嘘みたいに見事に的中した。

最初の自己紹介みたいなので言ってたが、バレチノとテルミはハンターだ。

ハンター証も見せてもらったけど、初めて見たから本物かどうか分からないが、嘘を言ってる風ではなかった。

テルミは胡散臭い人だが、バレチノの知り合いらしく、一応ちゃんとしたハンターらしい

バレチノがクルタ族の集落まで来たのは、俺の予想とはちょっと違った。

遺跡ハンターのバレチノは、世界中の遺跡があるところに、年がら年中飛び回ってるらしく。

数十年前、クルタ族の集落から一番近い街に滞在してる最中に、クルタ族の大人達と偶然出会い。

遺跡ハンターである、バレチノの古代の歴史や文化の知識の豊富さに、クルタ族の間は知識欲の高さが多い者が多く。

バレチノの生で見た遺跡などの話を聞き、すぐに意気投合したらしい。意外と単純な奴が多いな……

その仲良くなった者達と数年交流をとったりしていたら、自然と遺跡の調査や遺跡までのガードなどを、クルタ族に頼むようになったらしい。

バレチノ曰わく、下手なハンターより強いクルタ族は頼りになったとか。

そういえば、数名の大人が街に下りて、数ヶ月帰って来ない時もあったな。

ある日、バレチノが知り合いのバイヤーから、クルタ族の緋の目が裏の競売で大量に流れている、と聞いたのが始まりで。

クルタ族の強さを知っているバレチノは驚き疑ったものの、ハンターの繋がりや情報屋から、情報を得て、クルタ族を全滅に追いやった者達までたどり着き。

そうして1人でも生き残りはいないかと、クルタ族の集落を探しだしているところに

、どこからか聞きつけたのかわからない、テルミと合流しここまで来たのだ。

で、今は料理を食べ終え、バレチノは知り得た情報を全て喋った。隠す事なく全てを。

俺は知っていたが、人伝に聞いた事により、あの時の事を思い出し。嫌でも自分の【目的】を、必ず達成させねばならない事を再認識させられる。

俺の横に座ったクラピカを見る。

事実を聞かされた。

心まで決るように、おぞましく、醜い人の欲望。

ただ緋の目を奪うためにクルタ族を殺した、吐き気がするまでの欲望

クラピカは興奮状態になり眼は赤く染まり、体を小刻みに震わせ、

あます事なく全身全てで怒りを表していた

クラピカは怒りのあまり拳を机に叩きつける。

「そんな事のためにっ！ そんな事のために、みんな、みんなを殺したのか！」

目の前いないはずの相手に激情のまま言葉を吐く。

「許さない……、絶対に絶対にッ！」

原作のクラピカの怒りは知っている。

ここまでとは、原作とは違い、俺がいるからもう少し安定している
思っていた。

が、都合がいい、これでいい、これでいいんだ。

俺の目的にはクラピカが必要だ、これは決定事項なんだ。

俺がゲスなのはわかってる、自分の目的のためにクラピカを利用し
ようとしている。

罪悪感？ そんな物いくらでも受け止めてやるよ。

これはクラピカのためでもあり、見殺しにしたクルタ族のみんなの
ためでもある。

俺は胸が痛むのを無理矢理振り払い、クラピカを見て声をかける

「外に行くか」

「アルベル……」

俺の目を見返す瞳はまだ赤みを帯び、興奮状態は収まっていない

「頭冷やすぞ」

「わかった……」

席を立ち、クラピカの背を押すように、扉の前まで連れて行く

「すみません、バレチノさんテルミさん、外で頭冷やすしてきます。
気にせず、先に寝ておいて下さい」

「うむ、頼むぞ」

「テーブルは自分が片付けておきますので、ごゆっくり」

2人の返事を聞き、外に出た。

少し肌寒いが、今はそれが心地よささえ感じる。

無言で俺とクラピカは歩き、みんなが眠る広場まで場所まで行く。
広場に着き、墓と呼ぶにはお粗末な墓の前で俺とクラピカは立っている。

そのままどれくらいたったのだろうか、クラピカが落ちつくまで待った。

「ありがとう」

どうやら落ち着いたのか、クラピカが俺に話しかけて来た。

「何で礼なんだよ」

「何となく、かな？」

「なんじゃそれ？ 気持ち悪い事言っな」

「そうだね、ごめん」

「いいよもう、謝んな」

クラピカは母親と父親が眠る墓の前まで行くと、その前で片膝を付く。

「父さん母さん」

月の光でしかクラピカの顔はよく見えないが、俺には泣いてるように見える

「クラピカ……、話がある」

「僕もあるよ」

「そうか、先に言ってくれ。俺は後でいい」

「うん」

一度考えるように、俺から視線をずらし、また視線を戻した。

「僕はみんなを殺した、幻影旅団は許せない。アイツらを必ず捕まえてやる」

クラピカは墓を見渡し、言葉を続けた。

「絶対にみんなの眼を取り戻す。どこにあるのか今はわからないけど、

絶対に取り戻す、そしてここにみんなの眼を持って帰ってくる、いつまでかかってでも絶対に取り戻してみせる、僕はそれでいい……」

……」

原作通りか。

俺がいなかったら、間違いなく原作のままの道行きになっただろう。

だが俺がいるのだ、幻影旅団を知っている、どういう思考をして、どんな能力を持ち合わせているかを知っている。原作のままでは又ル、又ル過ぎる

俺には目的があるんだ、その目的のためには原作が始まる前までに、クラピカはもつと強くなつて貰う必要がある。

「俺もその意見には賛成だが、足りない、足りないんだよ、クラピカ」

「アルベル？」

クラピカは俺を見て、戸惑っているように見えた。

「何が、足りないの？」

「捕らえる？ 生温いんだよ、俺は俺は……」

俺はゴミだ、理解してる。

クラピカは甘い、原作ではその甘さが仇になった。

必要はない、そんな物は犬にでも喰わせてやる。

俺の目的には幻影旅団は邪魔だ、邪魔何だよ。

邪魔なら消せばいい、どんな事してもだ。

「俺は捕らえるだけじゃすまさない、殺す例え命乞いしようと、何しようが殺す」

多分俺はあの時、1人でみんなを埋め、泥と血が手に付いたのを洗い流した時、人として大事な物まで、水と一緒に流してしまったのかもしれない。

「ア、アルベル？」

クラピカは俺ではない、別の何かを見ている目をしている。

俺が次に発する言葉は卑怯な言葉だ、クラピカは絶対に断らないとわかっているから。

「だから俺に力を貸して欲しい、ゲス共を殺すために力を貸してくれ。

俺にはもうクラピカしかいないから、クラピカしか頼めない、お願いだ」

クラピカに2度目となる、本気のお願い。

答えはわかっている、俺にはクラピカしかいないように、クラピカにも俺しかいないから。

しばらく黙っていたクラピカが答えた、それは俺の予想通りの物であつた。

クラピカの顔は見れなかった、どんな顔をしていたのか、どんな事を考えていたのか、少し怖くなってしまったから。

はち話（後書き）

少しか進展しましたが、いまだに集落がら出てないです
展開が遅いと思われた方申し訳ありません

キュウ話（前書き）

オリキャラ難しいです。

キユウ話

欲しいのは、力とそれを扱える知識と経験。

俺の目的の邪魔になる、旅団抹殺には必要な物が腐るほど存在している。

まず優先事項なのは【念】の修得、これを絶対に覚えなければならぬ。

早ければ早いほうがいい、経験、知識をより多く蓄えられる。

なら、どうする？ 答えは念を使える者に師事して貰うのが手っ取り早い。

なら、誰に？ 答えは今この村にいる、ハンターに師事して貰う。

俺には今運が向いている、ご都合主義に乗っかるか？

しかし運は離れる、次が上手く行く何て事はわからない。うまく事が運ばいいが、人間落ちる時はトコトン落ちる。

落ちたらそこでお終い、這い上げれるなんてそれこそ無理だ、まるで夢のような話し、それが現実だ。

悲しいかな、俺が選べる選択肢が複数あるなんて、そんな贅沢な物は存在しない。

当たって砕けろ、か砕けたくないがしょうがないか。土下座でも何でもしてやるよ。

修練場でクラピカと朝の鍛錬を終えた後、俺はその事をクラピカに話した。

クラピカは誰かの元で鍛える事を、何の迷いもなく頷き賛成してくれた。

原作前のクラピカはどう考えていたかは知らないが、今のクラピカは自分の弱さを知っており、自分達2人だけで鍛えても、いずれ限界が来る事も理解しているのだ。

それに冷静さを保っているクラピカはトコトン鋭い、俺がクラピカに弟子入りの事を言ってきたのが、多分わかっていただんだと思う。

「いいのか本当に？」

「僕はアルベルに付いて行くよ、それに前に約束したよね」

「そうだな」

「違うよ、アルベル」

「え？」

クラピカは何かを決心をしたような顔で、俺を真っ直ぐに見つめてくる。

俺の本心を打ち明けてから、顔には出していかったが、心の中で葛藤していたのはわかっていた。

クラピカは優しい、あれだけ憎しみを抱いている相手を殺す、ではなく捕まえる、と無意識に言ってしまうほど優しい奴だ。長年一緒にいる俺が一番知っている

そんな葛藤があったのかさえわからない程、クラピカの顔には一切迷いがなかった。

「僕に言っただじゃないか、傍にいるって、どこにも行かないって」

「あれか……」

あの時勢いで言っただが、今思うと、とんでもないセリフだよな。決して男に言っただいいセリフじゃない。

「嘘つきだよ、アルベルってさ」

「そうか？」

「うん、あの時言った事は嘘でもいいよ、でも決めたんだ」

「何を？」

「今度は僕が約束するよ、僕はアルベルの傍にいるし、僕はどこにも行かない」

「は？」

予想外のクラピカの言葉に、俺はポカーンと口を開けたまま放心状態になった、かなり間抜けな姿だったはず。

そんな間抜け面がおかしかったのか、クスリと笑い、嬉しそうに続けた。

「約束だからね？ 僕は破るつもりはいよ」

なにを言っているんだコイツは……、人の事言えんが、よくそんな恥ずかしいセリフがいえるな。

珍しく年相応に、いたずらっ子みたいに笑うクラピカに、俺は何も言う事ができず、ただただ黙ってクラピカを見ていた。

「おおう、やはりここにおったか」

変な空気が漂っている修練場に、バレチノがやって来た。

「どうしたんですか、バレチノさん？」

「話したい事があるんじゃないが、ちよつと良いかの？」

「俺達は構いませんけど、何か大事な話しなんですか？」

「クラピカの家に行ってから話そう、テルミも待たせておるしの」

俺と、クラピカはバレチノの後を付いて行く。

何の話した？ そろそろ集落から下りる事を言つつもりか、なら行動に移さなければならぬ。

クラピカの家に戻ると、どこから持ってきたのかわからない、ティーセットで優雅に紅茶を飲んでいるテルミがいた。

「待たせたの」

「いえいえ、皆さんを待っている間に、美味しい紅茶を飲む事ができましたので、

お気になさらずに」

「うむ、まず2人共座れ、話しはそれからじゃ」

「はい」

「ういっす」

全員席に付いたのを確認したバレチノは、一度ゴホンと咳払いをして、語り始めた。

その内容は、原作前にクラピカが辿るはずだった物に近いのかもしれない。

バレチノは俺とクラピカを保護し、信頼できる知り合いの施設に預ける事だった。

バレチノはそこそこ稼いでいる、稼いだ額の大半をその施設に出資し、親がいなくても立派に育つように、様々な教育を施しているらしい。

なぜ、そこまでして子供によくしているのかわからない。

しかしバレチノは想像以上の善人だ、原作クラピカがハンターの職に、あれだけの思いを持つのもわからんではない。

だが、そんな悠長な事してられん、俺の目的を達成させるには、そんな施設で時間を無駄にする事はできない。

「どうする？ お前たちなら、文句なしで施設に入れるぞ」

俺はクラピカを見て、任せるよ、の呟きを聞いてバレチノに答えた。

「とてもいい話ですが、すみません」

俺は頭を下げる。

「やっぱりの、そんな気がしておったわ」

何がおかしいのか、バレチノが笑った。

「せっかくのお話し、申し訳ありません」

「かまわんよ、それとー……思ってもない事で謝らんでいい」

「何がでしょうか？」

笑っていたはずのバレチノの顔付きが鋭くなり、俺を睨む。

敵意のある視線に、俺は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「ふむ、大人を甘く見るなよ若僧……、すみませんと口に出しているが、

それは本心ではなからう？ 悪いとは思ってもいないくせにの、
お前のその癖が、俺は気に入らん」

見透かされた、舐めていたバレチノを。

俺は黙ってしまい、何も言い返す事ができなかった。

何か言いたそうなクラピカを手で静止させる。

「彼には悪気はないようですから、その辺りでおやめない、
誰しも本心を隠すの当然の事です。あまり目くじら立てるのはよ

くありませんね」

沈黙を破ったのは予想外にテルミだった、まさか俺をフォローしてくれるとは。

「テルミ、お前は相変わらずじゃな、しかしこの小僧は危うい、

いずれ自分が付いた嘘で全てを壊しかねん、なら注意するのが大人の仕事じゃ」

「偽善的ですね、嫌いではありませんが、好きでもありません」

「なら、黙っておれ」

「やれやれ、あなたがそれを注意したとしても、人の本質は短期間で治る物じゃあ

りませんよ、これ以上無意味な説教を続けるのは時間の無駄です、そう無駄です」

「……ふん」

バレチノは機嫌を悪くしたのか、鼻息をならし、そっぽを向いた。

「アルベル君、話せるそこまで話して下さい、話したくなければ結構ですがね」

やはりこの人は苦手だ、何もかも知っているような言い方、笑顔の裏に何かがある、気味が悪い。

どちらにしろ言わねばならない事だった、ちょうどいい、もう俺は止まれないんだ。

「わかりました、クラピカもいいな」

「うん、アルベルに任せるよ」

俺は話した、幻影旅団の事も、力が欲しい事を、弟子にして欲しい

事も。

「最初からそう言えばよかったんじゃ、しかし復讐のための力か……」
「反対ですか？」

「そんな事は言わん、復讐したければしたらいい、良いか悪いとは関係ない。」

人が成長するのは理由は何にしろ、目的が必要だと俺は思っておる
よく復讐はイカンとか言う奴こそ信頼できん、それをなす信念、
意思を

貫き通し、目的の先に何を見るか、それこそ成長を促す物だと思
っておる」

「バレチノさん」

「しかし、弟子か……、俺は無理じゃな、人に師事する事は苦手だ
しの」

悩むバレチノを俺をよそに、俺はもう1人この場にいるハンターを
見た。

「テルミさん、お願いします、俺達をあなたの弟子にしてください。
ブラックリストハンターである、あなたにお願いしたいんです！」

椅子から降り、頭を下げる。

ブラックリストハンターとは、凶悪な犯罪者の賞金首を専門に捕縛
する、スペシャリスト。

捕まえるのは殺すより難しい、それを実現させるまでの力が俺達に
は必要だ。

最初から決めていたハンター証を見た時から、2つ星のブラックリ
ストハンターのテルミに、最初から俺は何とかして弟子にして貰う
事を。

テルミの人間性何か関係ない、強くなれる可能性が高い方に付く、

俺自身の感情なんて二の次だ。

いきなりそう言われたテルミは、大した感情の揺れも見せずに、貼り付いた笑顔をピクリと動かす事もなかった。

「おや、自分ですか？、今までの流れだとバレチノに頼むと思っていたのですが」

「お願いします、僕とアルベルは強くないダメなんです！」

テルミの言動からは、全く感情を読み取れない。

「ほう、いいんじゃないか、お前確か弟子が既におったろ？」

「あれは例外ですよ」

テルミは困りましたね、と全然困ってなさそうに、ポリポリとこめかみをかく。

必死にテルミに頭を下げる、最近人に頭下げすぎだな、でもこれしか出来る事は俺にもクラピカにもない、ただ頭を下げるだけ。

了承の返事を聞けるまで頭を上げるつもりはない、粘りまくってやる。

「テルミよ、弟子にしてやれ、少し鍛錬の様子を見たが、

2人ともセンスはあるようだしの、お前の弟子にもいい刺激になるじゃろ」

「まったく、他人事だと思って好き勝手言いますね」

「事実じゃろ？ 俺が今度仕事手伝ってやるし、弟子にしてやれ、

2人とも弟子にするって、言うまで動かん気だぞ」

「そのようですね、仕方ありません、まず2人とも顔を上げて下さい」

テルミの弟子入りにたいする、肯定とも否定とも取れない言葉を聞き、俺とクラピカは頭を上げた。

「ふうー、気持ちは理解しました、ですが生半可な事ではないですよ。」

ブラックリストハンターと動向するという事は、危険が付き物です。

私自身も色々やって来ますから、相当な人間から恨みを持たれてますし、

どんな事があるかわかりません、それでもいいのですか？」

「はい、耐えてみせます」

「僕はアルベルと一緒になら、どんな事でも耐えられます。」

アルベルと一緒にならどんな困難だって、立ち向かえる自信があります」

クラピカあ……、その発言は問題あるのではなからうか。

「いいでしょう、しかし3点ほど条件があります」

条件だと、何かムチャな事言われたらヤバいな。

「条件とは？」

「一つは自分の弟子となるのなら、2人には自分の仕事を手伝だつて貰います」

「はい、大丈夫です」

「僕もです」

それぐらいがちょうどいい、俺達が進む道は険しい程がいい、それを糧にしてやる。

「2つ目は、自分の指示に従ってもらいます。ただし無理だと判断したら、

断ってくれても結構です」

無理だと判断したら断っていいとは、俺達を試すって事が、やってやる。

「最後が一番簡単だと思います、多分ですが……、それは――」

一瞬だが、テルミの笑顔が歪んだように見えた。

最後の条件に俺とクラピカは驚きを隠せなかった、まあ頑張ります、としか言えなかったのだ。

「許可しましょう、今日からあなたは自分の弟子です。」

条件はしっかり守って貰います、特に最後の条件は頑張って下さい」

「はい、頑張ります」

「僕も頑張ります」

進めた、後は俺次第でどう転ぶかわからない。

正直テルミがこんなに簡単に、返事をしてくれるとは思ってなかった。

テルミの言動は全て芝居がかってて、バレバレなのに、それがワザとなのかわからない。

どうもテルミは、俺達2人が弟子入りをお願いした事すら、わかっていた気がする。

全てテルミの計算通りに進んだ気がしてしょうがない、根拠のない勘だが。そんな予感が俺につきまとう。

「話しは纏まったようじゃな、なら俺は明日にはこの村から下りて、

街に行くのでしょうか、テルミはどうするんじや？」

「自分も明日には下りるつもりですよ、それでは最初の指示です、2人とも出発の準備を整えて下さい、やる事が多いでしょうが、期限は明日の朝までです、しばらくここには帰って来れないでしょうから、

悔いが残らないようにしときなさい、いいですね？」

明日かよ、と思ったが、俺とクラピカは師匠となったテルミに頭を下げ、クラピカの家から出た。

とりあえず、持っていく荷物を纏めなくてはいけない。

「ありがとう、クラピカ、俺のわがまま聞いてくれて」

「アルベルって馬鹿だよな」

「なにい！」

「朝言ったよね、僕はアルベルに付いて行くって」

クラピカもテルミの異常性を気付いているはずだ、俺より鋭いクラピカが、テルミの芝居がかった言動に疑問を持つのは当然だ。

「ところで渡したい物があるんだけど」

「いきなりだな、何かくれんのか？」

「倉庫に置いてあるから、取りに行こう、ついでに持って行く物もあるしね」

「なら、さっさと行こうぜ」

「うん」

倉庫に付いたら、クラピカが一番手間にある木箱から、包装されている何かを取り出した。

「はい、これ」

クラピカがそれを持って来て、俺に手渡した。

「何これ？ ちょっと重いか」

「開けてみてよ」

俺は包装をほどき、中から出てきた物を手に取った。

「籠手、鉄の籠手か？ 鉄にしては軽いな？」

「鉄じゃないよ、ジョウセツガ地方で取れる特殊な鉱物の二ナールウ石を」

削って作った物らしい、硬度は鉄より硬く、鉄より軽いから使い勝手はいいと

思う。かなり珍しい鉱物だから、市場にもなかなか出回ってないって話し」

ふざけた名前だが、触って見た感じかなり頑丈だ、しかも重いと言っても苦にならないレベル、こういう物に興味はないが、かなり良い物だと思う。

内側に、変な模様のような字が沢山書かれてるが、これはデザインなのか？ 見覚えがあるんだが忘れてしまった。

「これをどこで？」

「父さんが若い時に使ってたのを、あんな事がある以前に僕が貰ってたんだ」

「いいのか？ そんな大事な物、俺が貰って？」

「いいよ、前にアルベルと稽古した時、何か武器を持った方がいいって」

言っただでしょ、あれからこの父さんの籠手を思い出して、渡そうと思って

ただ、バレンチノさんやテルミさんが来たから、渡すのが遅れちゃったんだ」

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして」

何か爽やかだな、これが若さか？

ちょっとこれ付けてみるか、ガチャガチャと籠手を弄っていると。

「アルベル、付けてみたい気持ちはわかるけど、先に荷物を纏めようよ」

「あ、そうか、スマン」

「うん、ゆっくりやったら日が暮れそうだしね、街まで長いから体も休めないよ」

「おう、わかった」

結局明日の準備が終わる頃には、日が暮れていた。

「こうなる事が全部わかっておったな、テルミ」

「フフッ、何の事でしょうか」

テルミは紅茶の入ったカップを手に取り、口を付け、わずかに残っていた紅茶を全て飲み干した。

「白をきりおって、最初からおかしかったんじゃ、幻影旅団の手掛かりを探すために」

、付いて来たのかと思ったが、数日立つても手掛かりを探す気配
すらない、

何をしているかと思えば、ずっとアルベルを観察していただけ」

テルミは大袈裟に両手を上げ、万歳のポーズをとる、人を馬鹿にした
様子にバレチノは僅かに苛立つ。

「バレてましたか、お手上げです、さすが抜け目がないですね」

「あの子達が生き残っておったのも、知っておったのか？」

「さあ、どうでしょう、知っていたのかもしれないね」

バレチノが机を叩き、机がそのショックでギシギシと軋む。

「まあそう怒らずに、勘違いして貰っては困ります」

「何がじゃ」

「自分はその2人を利用して、何かしようとは思っていません、強
いて言えば、

気になっただけです、あの2人、いえ、アルベル君のほうがです」

「なぜじゃ？確かにあの小僧はなかなか面白いが、気にする程の人
間なのか？」

テルミは答えない。

ただ笑っている、その顔からは、長年の人生経験を持つ、バレチノ
ですらわからない程に何も伝わって来なかった。

「ちつ、お前のそういう所が俺は嫌い何じゃ」

「すみません、秘密と言うことで勘弁してただけませんか？」

「ふん、どちらにせよ、あの2人が選んだことじゃからの、俺が心
配するの」

お節介がすぎるの……」

「別にとって食おうなんて思ってません、少しばかり大変な目にあっただけです」

「当然じゃな、ハンターの弟子はそういうもんじゃしな」

バレチノが笑う、テルミは僅かに目を細め何かを考えだす。

それはアルベルとクラピカの事かもしれない、それはテルミにしかわからない。

「ああそう言えば、台所にお酒がありましたか飲みますか？」

「いらん、今はそういう気分ではない」

「なら自分だけ頂きましょう、今の自分は凄く気分がいいんです」

「珍しいの……」

「ええ、あえて言うなら、探し物がやっと見つかったって感じですね」

普段、感情を表情に出さないテルミが誰にでもわかるぐらい、色濃く笑っている。

それが逆に不気味でバレチノは何を見つけた、と聞けなかった。

外伝 もう1人の転生者その名は……（前書き）

外伝です

とあるキャラの話し

外伝 もう1人の転生者その名は……

これは愚かな者の話し。

夢が塵と消えた悲しき者の話し。

生まれ変わって、20数年、最初は喜んだ。

前世では引きこもりになってニート生活を送っていたら、30超えたあたりに病死した。

何かを得ることもなく、童貞のまま死んだ、二次の世界に没頭して死んだ。

あまりにも虚しい。

だからチャンスだと思った、全てをやり直せると思った。

このH×Hの世界でハーレムを作って、ウフフな生活を送ろうと思っていた。

甘かった、甘かったんだ。

世界は自分に厳しかった、もし神様がいるとしたら、俺は絶対に許さない。

「やあ、兄さん」

コイツだ、まずコイツだ、コイツが問題だ。

「聞いているのかい、兄さん？」

やめてよね、自分はお前と関わりたくないんだ。

自分は前世では一人っ子だった、それがこの世界で弟が出来た。
あまりにも凶悪な弟、自分を兄と呼んでいるが、絶対に自分を兄だ
と思っていない。

「ええ、聞いていますよ。ヒソカ」

H×H世界で最凶の男、ピエロのような格好で自分の前に唐突に現
れる。

「いい獲物が見つかったんだ、手を貸してくれないかな？」

ブラックリストハンターの兄さんにも、悪い話しじゃないよ」

勘弁して下さいよ！ どうせまた、ろくでもない話しを自分に持つ
て来たんだ！

絶対に自分はやらんぞ！ コイツのせいで何度も死にかけたんだ、
何度も何度も！

ガキの頃からそうだった、強面の奴らに喧嘩を売り、自分も巻き込
まれ、馬鹿みたいに修羅場をくぐった。

自分は伊達にコイツの兄ではなかった、修羅場を潜る度にドンドン
強くなった、努力なんてほとんどした事はない。

ひたすら実戦、殺し殺されそうの中で、生きるために必死で戦った。
様々な経験を積み重ね、気付けば念すら覚えていた。

幼少期はそんな感じで育った、女つけなんか全くない、もう一度や
り直すとか考える暇すらなかった。

13の頃に俺はそんな生活から逃げ出した。

ヒソカが追ってくる恐怖で怯えながら、俺はひたすら逃げた。ハー
レムを夢見て。

だがやはり世界は厳しかった、身分も何もない証明できない、ガキ
の俺に働き口なんて見つからなかった。

自分の念能力は戦闘に特化しすぎて、使い物にならない、戦いはもう嫌だった。

だって痛いのが嫌だもん。

限界を感じた14歳。

そこで思い付いたのが、ハンター証だ、売れば凄まじい額になると言われている。

腕には自信があつたし、原作で出てきたハンター試験程度なら、簡単に受かる自信があつた。

案の定受けてみると、ハンター試験は簡単だった。

2週間程の試験期間はもちろん、一緒に受けた女性を口説こうと思つて必死に駆け回つた。

だけど誰1人、俺の相手をしてくれる人間はいなかった。

女性どころか興味の無い男にすら、自分を怖がっている節があつた、なぜだ理解出来ない、言うのも何だが、自分はイケメンだ。

それに、ニコポイベントのために鍛えた爽やかな笑顔、どこで俺の運命の人がいるかわからないから、ヒソカから逃げ出した最中も、試験中もずっと笑顔を絶やさない。

女性を不快にさせないために、紳士のような言葉使いも覚えた。

なのになぜだ！

なぜモテない！ おかしいよ！ この世界おかしいよ！ 前世で読んだけどこういう、二次創作的な世界とかだったら、補修がかかってモテモテになるんじゃないの？ 間違ってるよ。

絶望感を味わっても俺は笑顔を崩さない、未来の嫁のためにじっと耐えてやる。

さらに世界は厳しかった、もう俺を見捨てたのかもしれない。

試験が終わり、ハンターの仕事の説明を受け、ハンター証を持って会場を出た。

売り払って、金持ちになって、女を侍らせるゲスな事を妄想しながら。

運命は残酷だ、そこで恐怖は自分に追い付いた。

「兄さん、久しぶりだね、ハンターになったんだ、おめでとう」

ヒソカが俺の前に現れた、普通ではなかった、おかしい格好をして顔に変なペインティングまでしていた。

自分は笑顔を崩さなかった、理由はわからない、まあ笑ってけって、思ったのかもしれない。

「さあ、行こうか、兄さん」

嫌だとは言えなかった、怖いもん。

外伝 もう1人の転生者その名は……（後書き）

多分バレバレですが、あのキャラです。

じゅう話（前書き）

今回はあまり進展がありません。

じゅう話

テルミの弟子になってから、その翌朝にクルタ族の集落から出発した俺達4人は2日かけ、日が暮れる前に街まで辿り着く事が出来た。余裕とまでは行かないが、昔に街まで下りて来た時と比べたら、マシだった事は確かだ。

道中、獣や魔獣に襲われたが、バレチノとテルミに片手間に追い払われた。バレチノの睨みだけで逃げて行ったのは驚いたな。

そのおかげで、俺とクラピカの体力の消耗は最小限に抑えられた事もあって、そんなに苦しくなかったんだと思う。

俺とクラピカだけだったら、かなり厳しかったかもしれない。

街に着くと、汗だけで息も絶えな俺とクラピカとは違い、バレチノとテルミはまだまだ元気だ、息一つ乱していない。

俺達の代わりに四六時中警戒して、まともに寝てる気配すらなかった筈なのに。

レベルが違い過ぎる事を、嫌でも認識させられた。

「うむ、到着じゃな、テルミはこれからどうするんじゃ？」

「自分はこの街のホテルに一泊するつもりですよ、さすがにこの状態での船旅は酷

でしょう」

テルミは俺とクラピカを見やると、相も変わらずな気持ち悪い笑顔で、ワザとらしく溜め息を付いた。

ホテルに一泊か、助かった、この状態で船旅何てしたらゲロ吐いてる。

「バレチノこそどうされるのですか、ご一緒しますか？」

「そうしたいが、前の現場の遺跡の方も気になるしの、直ぐにでもここを立つつ

もりじゃ」

「そうですか、寂しくなりますね」

「全然寂しそうには見えんが……、まあよかるう」

ここでバレチノとお別れか、なんだかんだでこの人がいなかったら、俺達は今ここにいなかったしな。

「バレチノさん、ありがとうございます」

「本当にありがとうございます」

俺とクラピカがバレチノに頭を下げ、別れの挨拶をする。

バレチノは眉間にシワを寄せ、ジッと俺とクラピカを交互に見やつた。

「アルベル、最後に一つだけ聞かせてくれんか？」

「何でしょうか？」

「お前の進む道はあまりにも険しい、覚悟はできてるんじやろうな？」

「覚悟ですか？」

何を言ってるんだ？ 俺は幻影旅団を殺す覚悟ならとうに出来ている。

迷いもなければ、戸惑いもない、確実に殺す、なにがあるうともだ。

「その顔だと、わかっておらんようだよ」

「え？」

バレチノは残念だ、と言いたげに、少し悲しそうな表情をした。

「……テルミよ、すまん、この子達の事を任せるぞ」

「相変わらずお優しいですね、はい分かりました、なんて無責任な事は言いま

せんが、やれるだけの事はしましょう。それでもこの子達次第ですがね」

わかってないとはどういう意味だ、なぜ俺だけに聞いたんだ、クラピカはバレチノの覚悟の意味を理解し、覚悟してると言うことなのか。

「いいかアルベル、見失ってはいかんぞ、お前にはクラピカがある、

お前の目的の先に何があるかは、俺にはわからんが、立ち止まりそうに

なった時、決して振り向くな、そのまま引きずり込まれてしまうぞ」

「どういう意味でしょうか？」

「自分で考えるがいい、それがお前の成長を促すじやろ」

抽象的すぎて意味がわからない、説明が出来ないが心に何か来る物がある。

何だかムカムカする。

バレチノは俺とクラピカの頭をグリグリと撫でた、手がデカいしゴツゴツしてるから気持ち悪い。

やめろ、と言えない空気だしされるがままだ。

「それじゃあ、俺は行くぞ、テルミ、クラピカ、アルベル、3人共達者での」

そう言うとはレチノは振り向く事なく、去って行った。

あの人は俺とクラピカの事を、本当に真剣に考えてくれてた気がする。

恩返しはするさ、俺の目的が全て達成した時に必ず。

「それでは、自分達も行きましょう」

「はい」

「わかりました」

俺とクラピカはテルミの後を付いて歩く。

この街は港が近いためそこそこ栄えている、文明的には前世の頃と比べても代わりはないと思うけど、色々文化が混じってるのか、道行く人の格好がバラバラだ。

俺とクラピカのクルタ族の衣装でも、結構街に溶け込んでいる。

問題はテルミだ、さつきすれ違った人がチラチラ見てたし。

そりゃそうか、全身紫の男だ、文化だから！ で済ませていい格好じゃない。

奇異の眼差しで見られても、堂々としてるテルミは凄い人だ、絶対に真似はしたくないけど。

「着きましたよ」

10分程歩いてると、街に合わないぐらい結構デカイホテルの前に着いた。

俺とクラピカはテルミに全て任せている、ホテルに入ると、とんでもなく豪華だ。

俺はちよつと萎縮してしまう、村で育った田舎者の俺には色々場違いなのは、と言いたくなるぐらいの空気が漂っている。

クラピカはこれくらいじゃあ、動じないのか、テルミがフロントで手続きをしてるのを黙って待っている。相変わらず通常時はクール

だな。

「お待たせしました、これがキーです、なくさないように気を付けて下さい」

テルミが戻って来るとキーをクラブピカに手渡す。

「いいんですか、こんな高級そうなホテル？」

「ええ、お気になさらずに」

俺とクラブピカは一銭も払ってない、だってお金持ってないし。それから、俺はクラブピカと最上階の一室でくつろいでいる。ちなみにテルミは別室だ。

すげー豪華、飯とかもホテルマンが運んで来てくれたし。至れり尽くせりだ、VIP待遇の理由は、テルミがハンターでさらに2つ星のおかげだとか。

不気味な人で心から信頼できなさそうだが、弟子になった事だし信用はしておこう。

もしテルミが何かをたくらんでいるようなら、ヤバいと判断した時点で逃げるしかない。

嫌な師弟関係だが、簡単に気を許す程、俺とクラブピカは馬鹿ではない。

頭下げてお願いしたクセに、こんな事思つのもアレだが用心にこした事はないしな。

俺は一つ迷っている事がある、念の存在をテルミに聞かされる前に、クラブピカに伝えるかどうかだ。

テルミに修行開始する前に、先に念を教えて欲しい事を伝えたいが、クラブピカと意志疎通してなかったら手間がかかる。

あらかじめ念の事をクラブピカに話してスムーズに話しをもってい

たい。

しかし何て嘘を付く？ 昔みたいにクルタ族の大人の人みたいにばやかす事は不可能だ。まず信じるかどうか怪しいな。

クラピカは冷静な奴だから、ある程度証拠を見せないと、信じてすら貰えない気がする。

前世でもそうか、もし人に「この世には超能力みたいな力があるんだぜ」なんか言ったら、鼻で笑われて冗談と思われ流されるか、病院に連れて行かれてしまう。

クラピカにそんな事されたら、俺は多分落ち込む。

だが、言わなくちゃだめか、もし信じて貰えなくても、スムーズに進まず若干手間取るがしょうがないか。

俺はソファアでくつろいでるクラピカに話しかけた。

「なあ、クラピカ」

「ん、どうしたの？」

「ちょっと聞いてくれ」

「いいけど」

腹を括った、もし鼻で笑われたら枕に顔埋めて足バタバタして、心の均衡を保とう。

「……………ってな訳だが信じるか？」

話しきった、念はクルタ族の大人に聞いた事にしたけど、さあどうなる。

真剣な顔でクラピカは聞いてくれてたが、ちょっと怖い

「信じるよ」

「え？」

今信じるって言ったけど、本当か？ 自分で言ったけど説得力がほとんどゼロだぞ、大人から聞いたとか、色々突っ込まれたらヤバイ感じだったのに。

「何その顔、今の話し冗談だったの？」

「い、いや冗談でもなければ嘘でもないが、こんな簡単に信じて貰えると

は思ってたから、ビックリしただけだ」

「そう、でも僕は信じるよ」

あっさりだな、疑う様子すらない、俺を信じきってるって事か？
嬉しい事は嬉しいが、何か俺の適当な嘘でも信じそうで怖い

「なあ、俺って実は女なんだ……」

「変な嘘付かないでよ、気持ち悪い」

ええー、さすがにバレバレな嘘はダメか。

「なに考えたか知らないけど、アルベルの冗談を話す時とか一瞬でわかるから

何年一緒にいると思ってるの？ まったくアルベルは馬鹿だな」

「一言多くないか？」

「はいはい」

たまに辛口な事言ってくるな。

「念か……、父さんや先生が強い理由はそれだとしたら、納得だけど、

テルミさんはそう簡単に教えてくれるのかな？」

「また必死で頭下げるしかないだろ」
「そうだね」

頭下げるぐらいで念教えてくれるなら、いくらでも下げてやる

「もう寝る、明日は俺達には初めて船旅だ、今日の疲れも取れてないし」

「うん、僕も寝るよ」

俺とクラピカはバカみたいにデカイベッドに寝転ぶ、あまりの柔らかさに直ぐに寝てしまいそうだ。何という上質な羽毛布団……

「アルベル、お休み」

「おう、おやすみ」

極上のベッドの上で俺は意識を手放した。

じゅう話（後書き）

次回ジュウイチ話でまたオリキャラが出ます。
原作キャラとの絡みが見たい方スミマセン。
もうしばらくお待ち下さい。

外伝2 もう1人の転生者その名は……

泣きそうです……。

ヒソカに捕まり、昔のようにガンガン戦っています。

闘いの勘が落ちてると言われ、適当にヒソカが見繕った相手と闘わされました。

しかし女がいない、どこにもいない、いたとしても、なぜか一般ビールの女性は自分を避けます。

服装の問題もあるかもしれない、顔はイケメンだからね！ それは反論は許さない絶対にだ。

服装だ、服装に問題があるのだ、イケメンだからって、この服装してたら絶対にモテる筈がない。

「よく似合ってるよ」

嘘付け！ 何だその顔は、このコスプレ野郎が、お前の場合似合ってるのがすげーよ。

しかし自分の格好見てみる、NOだありえない。

自分は全身紫なのだ、紫の上下のスーツ、紫のハット、シャツだけ黒なのが救いか、全然救われてないけどね。

どうしてこんな格好してるのか、その発端は自分にも責任はあるが、これは酷いよ。

あれはヒソカと再び出会った日だった、いきなり現れて自分を拉致したヒソカに、些細な反撃をしたのがダメだった。

原作の知識でヒソカがピエロフォームになるのは知ってたが、現実で見たらインパクトが凄まじく、思わず自分は止せばいいのに。

「何その格好、ププッ」みたいな事を言ってしまった。

案の定邪悪な笑みを浮かべたヒソカが、自分を見て。

「ククツ、なら兄さんに、似合う服をプレゼントするよ」

と言われ、そのまま服を買いに連れて行かれた。

店に入ると、明らかに店の中で一番浮いてる、紫色のスーツ&紫色のハットを、何の躊躇もなく選び店員の所まで持って行きやがった。店に入って僅か10秒の出来事だ、やめちよくれ！って止める隙さえなかった。

サイズが合わない事を願い、試着したら驚く程ピッタリだった。

「兄さんの為に作られたような服だね、まるで運命、ククツ」

ねーよ、出逢うべくして出逢ったのがよりによって服かよ、俺はレディに会いたいんだよ。

そんなツツコミさえ出来ずに、スピーディーにお買い物を済ませやがった。

いまだに忘れない、あの時の店員さんの、苦笑いしながらの、ありがとうございました、その後の小さな声でイケてますよ、を。

まだ自分は若い成長するし、すぐ着れなくなるはず、とか思ってたのも甘かった。

ヒソカはそれを見越したのか、何着も追加でオーダーしやがった。

コ、コイツ、自分の成長具合もわかっていると言うのか……、もはや、人というカテゴリーに含んじやあいけないだろ、この人。

私生活の方は最悪だ、ヒソカが常時自分にくっ付いている、これのせいでハンター証を売る暇がない。

ヒソカに勇気を振り絞って遠回しに、どっか言ってくれない、と言ったら。

「ハンター証っていいよね、人殺しても、大抵の事はお咎め無しだ

からね」

だとよ、イカれてる、コイツは自分に全ての罪を被せてやがる。自分はハンターになって、犯罪者、悪人、バトル大好きな人以外の、一般ピープルを殺してはいない。

勿論ヒソカにも抑えてもらってる、この年で人生ドロップアウトしたくないから、必死でむやみやたらに殺さないように頼んだ。

なぜか悲しい事に、自分はハンター協会やその他関係者から、腕のいい若手ブラックリストハンターに認定されていた。

ハンター協会からは、なるべく捕まえて欲しいと言われたが、しようがないじゃないか、ヒソカのチョイスして来る奴は無駄に強いんだもん。

殺さなかったら、殺されてる、どうせ賞金かかってるクズの犯罪者の命なんて、自分の大事な、たった一つしかない命と比べたら、ゴミでしかないんだから。フッフツ。

邪悪だね自分って。

あれ？

危ない危ない、深みにハマるとこだった、ダークサイドに行きたくないぞ！

ありえない、ありえない、どうなってんだ、ヒソカに染められる所だった。

させんぞ、自分はあきらめない、こんな危ない職業捨てて、可愛い奥さん見つけて、エロい事するんだ。

ジュウイチ話（前書き）

オリキャラ登場です。

ジュウイチ話

船に揺られ3日程の航海は終了した。

初めての船旅は特に何のハプニングも起こらず、まったりしたものだ。

筋トレぐらいしかやる事もなく、あえて言うなら暇だった、体を全開で動かせないのが辛い。

クラピカは本を読むか、目を閉じて瞑想していた。

勿論俺とクラ

ピカはテルミに、念の修行を付けて貰う事をお願いした。

テルミは自身のホームに着いてから、その辺りの事もキチンと話す、と言われた。まあしょうがないか。

船を下りて、テルミのホームまで交通機関を利用して行っただけど、基本テルミもクラピカも口数が多い方ではなかったため、ずっと暇を持て余してした。田舎育ちの俺は体を動かしてる方が性に合う。

クラピカに暇だなんて言ったら、武器になりそうぐらいの分厚い本を渡された、荷物が俺より多いと思ってたが、こんな物入れてたのかよ。

街の一角、明らかに高級住宅地に俺達は今いる、テルミその高級住宅の一軒の門に手をかけていた。

「ご苦労様でした、ここが自分のホームです、さあ入りましょう」

一軒家って……。

怨みとか買われてる割に、隠れずに住んでるとか堂々とした人だな。それだけ、自分の力に自信があるのか、この人は原作キャラでいう、どの位置に入るぐらい強いのだろうか。

「一軒家って凄いですね」

「フーン、いいでしょう、男なら一国一城の主になるのは当然です」

「そうっすか……」

「それではどうぞ」

表情が読めないから、本気なのか冗談なのかサッパリわからない。

テルミは門を開けて進んで行く、庭とかもめっちゃ広い。

クラピカも珍しくキョロキョロと、あちらこちらを見ている。

テルミがドアノブを回し、玄関の扉を開いた。

「ただいま戻りました」

ドタバタと何かが、家の奥から走ってくる音だけ聞こえてくる。

「せえんせーい！」

叫び声に近い声を発して、玄関にやって来た少女に俺は思わず、魅入ってしまった。

ライトブルーの鮮やかな髪の色、普通なら違和感すら与える筈なのに、それを一切感じさせない程に美しく、その艶やかな髪をツインテールに纏めている。

容姿もまるで生きている人形と、言いたくなるぐらい可愛いらしく、目はパッチリ、服装は白一色で、それがさらに美少女を映えさせている。

クルタ族の人間も容姿のいい人間は多かったが、自分の目の前にいる少女と比べたら霞んでしまうほどだ。

身長もクラピカ（12歳現在推定150cm）より小さい、見た感じでは俺達より年は下だろう。

「先生！ お帰りなさいです！」

「ええ、ただいま戻りました、留守の間何か変わった事はありませんでしたか？」

「2日前にリッポーさんが来ましたが、ちゃんと追いついてきました！」

「ご苦労様です」

「ありがとうございます！ 先生！」

テルミが褒めるように優しく少女の頭を撫でた、くすぐったそうにもじもじする少女が、親猫に甘える子猫に見える。

テルミは撫でるのをやめ、俺達の方を見る。手を離された少女は名残惜しそうにテルミの手を見ていた。

「2人共申し訳ありません、この子がユリアン、自分の弟子です、

ほら、ユリアンちゃんと挨拶しなさい」

「はい！ 先生！」

ユリアンと呼ばれた、少女が俺達の方を見てペコリと頭を下げる。

「私の名前はユリアン・シュミット、11歳！ 偉大なブラックリ
ストハンターで

ある、テルミ先生の弟子です、2人ともよろしくお願いします！」

元気いっぱい笑顔と挨拶に、さすがの俺もたじたじだ。

そんな事考えてたら、俺の横にいるクラピカに肘でつつかれ、睨まれた。

何だよいきなり、あつ、自己紹介しろって事が。

「俺はアルベル、先日テルミさんに弟子入りさせて貰いました、よろしく」

「僕はクラピカ、アルベルと一緒に弟子入りしました、よろしくお願ひします」

「はい！ よろしくです！」

年下の女の子って何か新鮮だな。

何かクラピカが少女をジツと見てるが、とうとうクラピカもそんなお年頃か……。

違つか、クラピカはなにかユリアンを観察してる感じが。

「自己紹介は終わりましたね、ユリアン、電話で言つたように、部屋の方は

片付けて置いてくれましたか？」

「勿論です！」

ユリアンはテルミにめちやくちや懐いてるな、テルミのどこがいいのやら、短い間だけ一緒にいたが、テルミの怪しさは未だに拭えないぞ。

「クラピカ君、テルミ君、2人の部屋に案内しますのこちらにどうぞ」

「先生！ そんな事は私やりますので、休んで下さいです！」

「いえ、そろそろ夕食の時間なので、其方の方を頼みます」

「わかりました！ 今日は先生の好きなご馳走いっぱい作りますね」

「ありがとうございます。クラピカ君とアルベル君の分もお願ひします」

「……はい！」

ん？ 一瞬ユリアンに睨まれた気がするが気のせいかな？ きつと気のせいだな。

「どうされました？　こちらですよ」

俺達は広めの一室に案内された、部屋には家具も一通り揃っており、全てが新品だ。

テルミにその事を聞いたら、家具の全てを前の街のホテルに滞在中に電話で注文して用意してくれていたらしい。

テルミって実はいい人なのでは？　と一瞬思ったがそれはないか。

「この部屋はご自由に使ってもかまいません、何か足りない物があつたら、

自分に言つて下さい、来月にはお給料の方もお渡ししますので」

「きゅ、給料つすか？」

「いずれあなた達2人は自分の仕事を手伝つて貰いますので、その投資です。

年齢問わず、お金は必要ですからね」

この人常識人なのでは、いやいやそれはないか。

「テルミさん」

クラピカがテルミに話しかけた。

「はい？」

「あの子がそう何ですか？」

「そうです、クルタ族の村で話した弟子入りの条件の一つですが、アルベル君は

勿論覚えてますよね？」

「はい、当然覚えていますけど」

テルミが弟子入りの条件で出した最後の一つ。

『テルミの弟子と仲良くする事』

とりあえず頑張ります、とだけ返事したが、なぜそれが条件なのかいまだに謎だ。

ユリアンの印象は悪い訳ではないし、同じ立場、テルミの弟子何だから、それなりに仲良くはするつもりだ。下心は一切ない。

「……………頑張つて下さい」

コイツ何か隠してやがる、ユリアンは何か問題でもあるのか。

クラピカはテルミが何かを隠しているのか察知して、鋭い目つきでテルミを見る。

テルミは何も答えない、どこ吹く風だ。何も言わないつもりだな。

「自分は荷物を片づけないとダメなので、それでは、後夕食はユリアンが

呼びに来るまで待つていて下さい、それまでごゆっくりと」

「あ、ちよつと！」

結局テルミは何も言わずに出て行ってしまった。
怪しい……、ユリアンに一体どんな秘密が。

「どう思う、クラピカ？」

「よくわからないけど、あの子何か違和感があるんだ」

「違和感？」

「うん」

違和感が……、さつき睨まれた気がしたが、あれは気のせいじゃなかったかもしれない、でもなぜだ。

「はあ、クラピカとりあえず荷物片づけようぜ」

「……そうだね」

疑問は残るが、同じ弟子何だし直ぐに疑問は解決するだろ。
俺とクラピカは荷物を片づけ、余った時間で雑談していると、ドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

俺がノックに返事をする、ユリアンが部屋に入ってきた。
違和感、クラピカが言っていた違和感が、俺でもはっきりわかる。
まずさつき見せた笑顔なんて一切ない、明らかにダルそうな面倒くさがってる顔だ。

「おい、カス共」

「え？」

「飯が出来たぞ、本来ならお前ら何かに喰わせる豚の餌何かねーが、先生が作ってくれて言ったから特別サービスだ、感謝しろよ」

時間が止まったような感覚に陥った。

これがさっきの元気いっぱい、笑顔いっぱいの少女なのか……。

「聞いてんのか？ 間抜け面しやがって、飯が出来たんだからさっさと来い」

お前ら如きが先生待たせてんじゃないよ、ボケが」

辛口なんてレベルじゃないぞ、言葉全てに毒が入ってる。
心が弱かったら瀕死になりかねんぞ。

「ユリアン」

「あつ？ 何だカマ野郎、いきなり呼び捨てか、コラッ」

「そういう言葉使いはよくないと思う、女の子なら尚更だ」

クラピカ真面目だな、つかそこかよ。

もっと言うべき事があるだろ、暴言とか暴言とか暴言とか。

ユリアンの顔が心底愉快そうな顔に変わる。

「ハハッ、女の子？ 誰が？ どこにいるんだそんなの？」

ユリアンが俺達をからかうような感じでキョロキョロ部屋を見渡す。
嘘だろ、まさかユリアン、まじか。

「……ユリアン、君まさか」

「先入観に捕らわれてんじゃねーよ、アホ共、俺が女なんていつ言
ったよ、

先生も言つてねーだろバカが、俺はれっきとした男だ、見せてや
ろうか？ ん？」

俺とクラピカは何も言えない、言葉が出ない。

可愛いらしい顔でとんでもない毒を吐いたのが一撃。

見た目は完全に超美少女なのに、まさかの男だった発言で二撃目。
立ってられない程、精神に凄まじい衝撃を与えられた。

「3人共何しているんですか？」

テルミが一向に夕食を食べに来ない、俺達が気になったのか、それ
ともこの光景を見に来たのかわからないが、何時の間にか開けっ放
しのドアの手前にいた。

「先生、ちょっとお喋りしました、ごめんなさいです」

「かまいませんが、せっかくユリアンが作った夕食が冷めてしまい

ます」

ユリアンは一瞬で、可愛いらしい笑顔に早変わり、もう完全に別人。それだけ言々とテルミは先に居間の方に行ってしまった。

「……テメーラ、つまんない事を先生に言ったら、――死ぬぞ?」

この目はまじだ……、怖すぎる。

そう言ってユリアンも行ってしまった。

「僕達も行くぞ」

「あ、ああ、そうだな」

これから先、あれと仲良くしないとダメなのか、テルミの奴ろくでもない条件を出して来やがったな。

テルミ、やっぱり信頼はできなさそうか。

ジュウイチ話（後書き）

すみません、こんなオリキャラでした……

クラピカの身長って結構ありますね。

調べたら171cm

漫画だったら小柄に見えましたが結構普通でした。

ちなみに

レオリオ193cm デカいです

ゴン154cm キルア156cm

次話で修行編に入ります。

もしかしたら主人公の事でアンケートをとるかもしれませんが、お手数ですがその時はお力をお貸し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8860z/>

復讐者の仲間のような感じの人

2012年1月8日21時53分発行